

返る。……順一は思はず、階子段へ腰を懸けて、其の鯨のやうな状を凝と見た。

其の日の小篠は、いぢらしかつた。凡そ、午前から、大勢が、何んとか云ふ待合で、寄つて集つて、金子を道具に責め抜いた上を、半ば酒で裝潢すと、最う正體もなくなりながら、まだ其れでも、一寸遣つて、一目逢はして、……と言つた。

「繪なんぞ、己が描いて遣る。」

と五坂が墨を筆へ浴せて、小篠の三味線の、雪のやうな白綸子の胴掛へ、打覆けるやうに塗りつけて、

「そりや熊の形だ。嬉しいか、頂いて、それ弾け！ 弾け！」

と踏反返る。……

と其れでも、はい、と取上げた。胴掛の墨が浸んで、小腕を染めたは未しも、びしよ濡れにされたので、一式これが身の晴に……四乳を選んだ皮が弛んで、ぼこくと音が留まつた。其の時の小篠の顔。

「さあ、もう三味線では勤まりませんよ。」と、於登利が口を切るを機會に、殆ど手を取り、足取るばかり。

其れからも摺抜けて、何處へ行つてもしまりを付けた、臺所へ出て、お三に向つて、小兒の様に兩手を合はせて頼んだが、

「何んですねえ、野暮らしい、一寸おかみさん——」

と直ぐに喚いた。

支度へ倒すと、酒と涙で、足も付かず、浮いたやうに成つて居るのを見て——大悦喜で歸つて来た由……どつと一度煩つた時、於登利が懺悔したのである。而して餘り思ひ懸けない。辛く當つたのも何も彼も、皆あの人のためを思つたのだ、と眞個に眞面目に言ふ。敢て憎むべきではなからう。藝者の身のためを思つたら、或は然うするのが道かも知れない。於登利は瘦せて姿好く、跡巾を怠らぬ。

小篠の自殺したのは、懐中の、爪こすり、小刀など、七道具の、小さな萬能鋏の、尖の鋭いのであつた。

「姉さん、私が聞いても泣きたくなるのは、直翌日の事で、まだ逢ふ間がなかつたんだね、いつの間に書いたんだか、懐中か、みの中へ、五十錢銀貨を鼻紙に包んで——年ちゃん、櫻之實を買つてお食んなさい——」

白  
驚  
姉は聞いて、身を絞つて泣いたが、急に熱が加して震へるので、私は慌しく氷を取りに臺所へ下りた。



と先刻から二度ばかり詰替へに下りる毎に、丁度指にかゝる可い加減に、細く氷をおろしてある。其の都度、女中が氣を付けるのだ、とばかり思ったが、フト冷たさにつけて心付くと、其の細いのが溶けもせぬのに、女中の蚊帳は黙で揺れる。

冷りとしたが、黙つて氷囊を掴んで戻つて、姉の額に翳さうとした時であつた。

「孝さん、お疲れでせう。些とおかはり申しませう。」

と現のやうに聞えたは小篠の聲で、客に來たらしい明石の衣、縞目涼く蚊帳を通して、女扇を、

一寸疊んで、帯にさす……

「あゝ、お篠さん。」

と驚きもしないで、姉のお稻は、衝と起き直つて、手を取つた。……

雨の晴れた朝朗に、桔梗の露は星のやう。

姉は其れから清々しい。

## 歌行燈



宮重大根のふとしく立てし宮柱は、ふるふきの熱田の神のみそなはず、七里のわたし浪ゆたかにして、來往の渡船難なく桑名につきたる悦びのあまり……

と口誦むやうに獨言の、膝栗毛五編の上の讀初め、霜月十日あまりの初夜。中空は冴切つて、星が水垢離取りさうな月明に、踏切の棧橋を渡る影高く、灯ちらら〜と目の下に、遠近の樹立の骨ばかりなのを視めながら、桑名の停車場へ下りた旅客がある。

月の影には相應しい、眞黒な外套の、瘦せた身體に些と廣過ぎるを緩く着て、焦茶色の中折帽、眞新しいは扱て可いが、馴れない天窓に山を立てて、鍔をしつくりと耳へ被さるばかり深く嵌めた、剩へ、風に取りられまいための留紐を、ぶらりと皺びた頬へ下げた工合が、時世なれば、道中、笠も載せられず、と断念めた風に見える。年配六十二三の、氣ばかり若い彌次郎兵衛。

然まで重荷ではないさうで、唐草模様の天鵝絨の革靴に信玄袋を引搦めて、這個を片手。片手に蝙蝠傘を支きながら、

「さて……悦びのあまり名物の焼蛤に酒波みかはして、……と本文にある處さ、旅籠屋へ着の前に、停車場前の茶店か何かで、一本傾けて参らうかな。(何うだ、喜多八)と行きたいが、其許は年上で、些とそりが合はぬ。だがね、家元の彌次郎兵衛どの事も、伊勢路では、これ、同伴の喜多八にはぐれて、一人旅のとぼ〜と、棚からぶら下つた宿屋を尋ねあぐんで、泣きさうに成つたとあるです。處で其許は、道中松並木で出來た道づれの格だ。其の道づれと、何んと一口遣らうではないか、え、捻平さん。」

「また、言ふわ。」

と苦い顔を澁くした、同伴の老人は、まだ、其の上を四つ五つで、やがて七十なるべし。臘虎皮の鍔なし古帽子を、白い眉尖深々と被つて、鼠の羅紗の道行着た、股引を太く白足袋の雪駄穿色褪せた鬱金の風呂敷、眞中を紐で結へた包を、西行背負に胸で結んで、これも信玄袋を手につ。片手に杖は支いたけれども、足腰はしやんとした、人柄の可いお爺様。

「其の捻平は止しにさつしやい、人聞きが悪うて成らん。道づれは可けれども、道中松並木で出來たと言ふで、何とやら、其の、私が護摩の灰でもあるやうに聞えるぢや。」と杖を一つ丁と支くと、後の雁が前に成つて、改札口を早々と出る。

故と一足後へ開いて、隠居が意見に急ぐやうな、連の後姿をじろりと見ながら、



「それ、其處が其れ捻平さね。松並木で出来たと云つて、何もごまのはひには限るまい。尤も若い内は遣つたかも知れんてな。は、は、」  
人も無げに笑ふ手から、引手繰るやうに切符を取られて、はつと驛夫の顔を見て、きよとんと生眞面目。

成程、此の小父者が改札口を出た殿で、何をふら／＼道草したか、汽車は最う遠くの方で、名物焼蛤の白い煙を、夢のやうに月下に吐いて、眞蒼な野路を光つて通る。……

「やがて爰を立出で辿り行くほどに、旅人の唄を聞けば、」  
と小父者、出た處で、けろりとして又口誦んで、

「捻平さん、可い文句だ、これさ。……」

時雨蛤みやげにさんせ

宮のおかめが、……ヤレコリヤ、よヲしよし。」

「旦那、お供は何うで、」

と停車場前の夜の限に、四五臺朦朧と寂しく並んだ車の中から、車夫が一人、腕組みをして、のつそり出る。

これを聞くと彌次郎兵衛、口を捻ぢつて片頬笑み、

「難有え、圖星と云ふ處へ出て來たぜ。が、同じ事を、これ、(旦那衆戻り馬乗らんせんか、)と何故言はぬ。」  
「へい、」と言つたが、車夫は變哲もない顔色で、其のま、棒立。

二

小父者は外套の袖をふら／＼と、酔つたやうな風附で、

「遣れよ、さあ、(戻馬乗らんせんか、)と、後生だから一つ氣取つてくれ。」

「へい、(戻馬乗らんせんか、)と言ふでございませうかね、戻馬乗らんせんか。」

と早口で車夫は實體。

「は、は、は、法性寺入道前の關白太政大臣と言つたら腹を立ちやつた、法性寺入道前の關白太政大臣様と來て居る。」と又アハ、と笑ふ。

「さあ、もし召して下さい。」

と話は極つた筈にして、委細構はず、車夫は取着いて梶棒を差向ける。

小父者、目を据ゑて故と見て、

「ヤレコリヤ車なんぞ、よヲしよし。」



「否、よしではない。」

と其處に一人つくねんと、添竹に、其の枯菊の縫つた、霜の翁は、旅のあはれを、月空に知つた姿で、

「早く車を雇はつしやれ。手荷物はあり、勝手知れぬ町の中を、何を當にぶらつかうで。」と口叱言で半ば呟く。

「いや、先づ一つ、(よろしよし、)と切出さんと、本文に合はぬてさ。處へ喜多八が口を出して、(せうろく四錢で乗るべいか。)馬士が、(そんなら、ようせよせ。)と言ひやす、馬がヒインくと嘶ふ。」

「若いもの、其の人に構ふまい。車を早く。川口の湊屋と言ふ旅籠屋へ行くのぢや。」

「え、二臺でござりますね。」

「何んでも構はぬ、私は急ぐに……」と後向きに掴まつて、乗つた雪駄を爪立てながら、蹴込みへ入れた革靴を跨ぎ、首に掛けた風呂敷包みを外づしもしないで揺つて置く。

「一運託生、死なば諸共、捨平待ちやれ。」と、くすくす笑つて、小父者も車にしやんと乗る。……

「湊屋たえ、」

「おいよ。」

で、二臺、月に提灯の灯黄色に、廣場の端へ駈込むと……石高路をがた／＼しながら、板塀の小路、土塀の辻、徑路を縫ふと見えて、寂しい處幾曲り。やがて二階屋が建續き、町幅が絲のやう、月の光を廊で覆うて、兩側の暗い軒に、掛行燈が疎に白く、柵柳に星が亂れて、壁の蒼いのが處々。長い通りの突當りには、火の見の階子が、遠山の霧を破つて、半鐘の形活けるが如し。……火の用心さつさりやせう、金棒の音に夜更けの景色。霜枯時の事ながら、月は格子にあるものを、桑名の妓達は宵寝と見える、寂しい新地へ差掛つた。

輻の下に流るゝ道は、細き水銀の川の如く、柱の黒い家の状、恰も瀬が祭禮をして、白張の地口行燈を掛連ねた、鐵橋を渡るやうである。

爺様の乗つた前の車が、はたと留つた。

あれ聞け……寂寞とした一條廓の、棟瓦にも響き轉げる、轍の音も留まるばかり、灘の浪を川に寄せて、千里の果も同じ水に、筑前の沖の月影を、白銀の絲で手繰つたやうに、星に晃めく唄の聲。

博多帯しめ、筑前絞、

田舎の人とは思はれぬ、

歩行く姿が、柳町、



と博多節を流して居る。……つい目の前の軒陰に。……白地の手拭、頬被、すらりと瘦ぎすな男の姿の、軒の其の、うどんと紅で書いた看板の前に、横顔ながら俯向いて、たゞ影法師のやうにイむのがあつた。

掬平はフト車の上から、頸の風呂敷包のまゝ、振向いて、何か背後へ聲を掛けた。……と同時に彌次郎兵衛の車も、丁度其の唄ふ聲を、町の中で引挟んで、がつきと留まつた。が、話の意味は通ぜずに、其のまゝ、掬平のが又曳出す……後の車も續いて駈け出す。と二臺が一寸摺れ／＼に成つて、すぐ舊の通り前後に、流るゝやうな月夜の車。

三

お月様が一寸出て松の影、

アラ、ドッコイシヨ、

と沖の浪の月の中へ、颯と、撥を投げたやうに、霜を切つて、唄ひ棄てた。……饅飩屋の門に博多節を弾いたのは、轉進を稍々縦に、三味線の手を緩めると、撥を逆手に、其の柄で弾くやうにして、仄のりと、薄赤い、其屋の板障子をすらりと開けた。

「ご免なさいよ。」

頬被りの中の清しい目が、釜から吹出す湯氣の裏へすつきりと、出たのを一目、驚いた顔をしたのは、帳場の端に土間を跨いで、腰掛けながら、うっかり聞惚れて居た亭主で、紺の筒袖にめくら縞の前垂がけ、草色の股引で、尻からげの形、によいと立つて、

「出ないぜえ。」

は、づるいな。……案ずるに我が家の門附を聞徳に、いざ、其の段に成つた處で、件の(出ないぜ)を極めてこまそ心積りを、唐突に頬被を突込まれて、大分狼狽へたものらしい。尤も居合はした客はなかつた。

門附は、澄まして、背後じめに戸を閉てながら、三味線を斜にすつと入つて、

「あい、親方は出ずとも可いのさ。私の方で入るのだから。……ねえ、女房さん、そんなものぢやありませんかね。」

と些と笑聲が交つて聞えた。

女房は、これも現下の博多節に、うっかり氣を取られて、釜前の湯氣に朦として立つて居た。

……浅葱の袴、白い腕を、部厚な釜の蓋に一寸載せたが、圓髻をがつくりさした、色の白い、齒を染めた中年増。此の途端に颯と臉を赤うしたが、竈の前を横ツちよに、かたくと下駄の音で、亭主の膝を斜交ひに、帳場の錢箱へがつちりと手を入れる。

燈行歌



「あ、御心配には及びません。」  
と門附は物優しく、

「申戯だ、強請んぢやありません。此方が客だよ、客なんですよ。」

細長い土間の一方は、薄汚れた縦に六疊ばかりの市松疊、其處へ上れば坐れるのを、釜に近い、床几の上に、ト足を伸ばして、

「何うもね、寒くつて堪らないから、一杯御馳走に成らうと思つて。え、親方、決して其の御迷惑を掛けるもんぢやありません。」

で、優柔しく頬被りを取つた顔を、唯見ると迷惑處かい、目鼻立ちのきり、とした、細面の、  
瞼に窺は見えるけれども、目の清らかな、眉の濃い、二十八九の人品な兄哥である。

「へ、へ、へ、いや、何うもな、」

と亭主は前へ出て、揉手をしながら、

「しかし、此のお天氣續きで、先づ結構でござりやすよ。」と何も無い、煤けた天井を仰ぎ、  
帳場の上の神棚へ目を外らす。

「お師匠さん、」

女房前垂を一寸撫でて、

「お銚子でございますかい。」と莞爾する。

門附は手拭の上へ撥を置いて、腰へ三味線を小取廻し、内端に片膝を上げながら、床几の上に

素足の胡坐。

ト裾を一つ搔込んで、

「早速一合、酒は良いのを。」

「え、もう飛切りのをおつけ申しますよ。」と女房は土間を横歩行き。左側の疊に据ゑた火鉢の  
中を、邪険に火箸で搔い掘つて、赫と赤く成つた處を、床几の門附へずいと寄せ、

「さあ、まあ、お當りなさりまし。」

「難有え、」

と鐵拐に褌へ引挟んで、ほうと呼吸を一つ長く吐いた。

「世の中にあ、こんな炭火があると思ふと、里心が付いて尙ほ寒い。堪らねえ。女房さん、銚子  
を何うかね、ヤケと言ふ熱燗にしておくんさい。些と飲んで、うんと酔はうと云ふ、卑劣な癖  
が付いてるんだ、お察しものですぜ、え、親方。」

「へ、へ、へ、お方、それ極熱ぢや。」

女房は染めた前齒を美しく、



「あいく〜」

四

「時に何かね、今此家の前を車が二臺、旅の人を乗せて駈抜けたつけ、此の町を、……」  
と干した猪口で門を指して、

「二三町行つた處で、左側の、屋根の大ききうな家へ着けたのが、蒼く月明りに見えたがね、……  
……彼處は何かい、旅籠屋ですか。」

「湊屋でございませ、なあ」と女房が、釜の前から亭主を見向く。

「湊屋、湊屋、湊屋。此の土地ぢや、まあ彼處一軒でござりますよ。古い家ぢやが名代で。前に  
は大きな女郎屋ぢやつたのが、旅籠屋に成つたがな、部屋々々も昔風其のまゝな家ぢやに、奥座  
敷の欄干の外が、海と一所の、大い掛斐の川口ぢや。白帆の船も通りますわ。鱧は刎ねる、鯛は  
飛ぶ。頓と類のない趣のある家ぢや。處が、時々崖裏の石垣から、獺が這込んで、板廊下や厠に  
點いた燈を消して、悪戯をするげに言ひます。が、別に可恐い化方はしませぬで。こんな月の良  
い晩には、庭で鉢叩きをして見せる。……時雨れた夜さりは、天保錢一つ使賃で、豆腐を買ひに  
行くと言ふ。其も旅の衆の愛嬌ぢや言うて、豪い評判の好い旅籠屋ですがな、……お前様、此の

土地はまだ何も知りなさらんかい。」

「あい、昨夜初めて此方へ流込んで来たばかりさ。一向方角も何も分らない。月夜も闇の烏さね。」

と俯向いて、一口。

「どれ延びない内、底を一つ温めよう、遣つたり！ ほつ、」

と言つて、目を擦つて面を背けた。

「利く、利く。……恐しい利く唐辛子だ。恠う、親方の前だがね、つい過般も此の手を食つたよ、  
料簡が悪いのさ。何、上方筋の唐辛子だ、鬼灯の皮が精々だらう。利くものか、と高を括つて、  
お錢は要らない薬味なり、どしこと井へぶちまけて、松坂で飛上つた。……又遣つたさ、色氣は  
無えね、涙と涎が一時だ。」と手の甲で引擦る。

女房が銚子のかはり目を、ト掌で爛を當つた。

「お師匠さん、あんたは東の方ですなあ。」

「然うさ、生は東だが、身上は北山さね。」と言ふ時、徳利の底を振つて、垂々と猪口へしたむ。

「で、お前様、湊屋へ泊んなさらうと言ふのかな。」

其れだ、と門口で斷られう、と亭主は其の段含ませたさうな氣の可い顔色。

「御申戯もんですぜ、泊りは木賃と極つて居まさ。莫塵と笠と草鞋が留守居。壁の破れた處から、



鼠が首を長くして、私の歸るのを待つて居る。四五日は此の桑名へ御厄介に成らうと思ふ。……上旅籠の湊屋で泊めてくれさうな御人品なら、御當家へ、一夜の御無心申したいね、どんなもんです、女房さん。」

「こんなでよければ、泊めますわ。」

と身輕に銚子を運んで寄る。と亭主驚いた眉を動かし、

「滅相な。」と帳場を背負つて、立塞がる體に腰を掛けた。いや、此の時まで、紺の鯉口に手首を縮めて、案山子の如く立つたりける。

「は、は、お言葉には及びません、饅頭屋さんで泊めるものは、醬油の雨宿りか、鯉節の行者だらう。」

と呵々と一人で笑つた。

「お師匠さん、一つお酌さしておくんないまし。」と女房は市松の疊の端から、薄く腰を掛込んで、土間を切つて、差向ひに銚子を取つた。

「飛んでもない事、お忙しいに。」

「否な、内ぢや藝妓屋さんへ出前ばかりが主ですから、ごらんの通りゆつくりぢやえな。眞個にお師匠さん佳いお聲ですな。なあ、良人。」と、横顔で亭主を流眄。

「然よぢや。」

とばかりで、煙草を、はつ〜。

「なあ、今お聞かせやした、あの博多節を聞いたればな、……私や、ほんに、身に染みて、ぶると震へました。」

五

「然う讀められぢやお座が醒める、酔も醒めさうで遺瀨がない。たかが大道藝人さ。」

と兄哥は照れた風で腕組みした。

「私がお世辭を言ふものですかな、眞實ですえ。あの、其の、なあ、悚然とするやうな、恍惚するやうな、緊めたやうな、投げたやうな、緩めたやうな、まあ、何んと言うて可からうやら。海の中に柳があつたら、お月様の影の中へ、身を投げて死にたいやうな、……何んとも言ひやうのない心持に成つたのですえ。」

と、脊筋を曲つて、肩を入れる。

「お方、お方。」

と急込んで、譯もない事に不機嫌な御亭が呼ばはる。



「何ぢやいし。」と振向くと、……亭主何時の間にか、神棚の下に、斜と構へて、帳面を引繰つて、苦く睨み、

「升屋が懸は未だ寄越さんかい。」

と算盤を、ぱちり〜。

「今時何うしたえ、三十日でもありませんに。……お師匠さん。」

「師匠ぢやないわ、升屋が懸ぢやい。」

「そないに急に氣に成るなら、良人、ちやと行つて取つて来い。」

と下唇の芻調子。亭主ぎやふんと參つた體で、

「二進が一進、二進が一進、二一天作の五、五一三六七八九。」と、饅頭の帳の伸縮みは、加減だ

けで濟むものを、醬油に水を割算段。

と釜の湯氣の白けた處へ、星の凍てさうな按摩の笛。月天心の冬の町に、恰もこれ風を吹込む

聲す。

門附の兄哥は、ふと瘦せた肩を抱いて、

「あゝ、霜に響く。……と言つた聲が、物語を讀むやうに、朗に冴えて、且つ、鋭く聞えた。

「按摩が通る……女房さん、」

「えゝ、笛を吹いてですな。」

「畜生、怪しからず身に染みる、堪らなく寒いものだ。」

と割膝に跪坐つて、飲みさしの茶の冷えたのを、茶碗に傾け、ざぶりと土間へ、

「一ツ此奴へ注いでおくん、其の方がお前さんも手数が要らない。」

「何んの、私は些とも構ふことないのですえ。」

「否、御深切は難有いが、藥罐の底へ消炭で、湧くあとから醒める處へ、氷で咽喉を抉られさう

な、あのピー〜を聞かされちや、身體にひ〜つ裂がはひりさうだ。……持つて來な。」

と手を振るばかりに、一息にくつと呷つた。

「あれ、お見事。」

と目を睨つて、

「まあな、だけれどな、無理酒おしいなえ。澤山、あの、心配する方があるのですやろ。」

「お方、八百屋の勘定は。」

と亭主瞬きして顔を出す。女房は面白半分、見返りもしないで、

「取りに來たらお拂ひやすな。」

「えゝ……と三百は三錢かい。」



で、算盤を空に弾く。

「女房さん。」

と呼んだ門附の聲が沈んだ。

「何んです。」

「立續けに最う一つ。而して後を直ぐ、合點かね。」

「あい。合點でございますが、あんた、豪い大酒ですな。」

「せめて酒でも参らさば。」

と陽氣な聲を出しかけたが、つと仰向いて毗を上げた。

「あれ、又來たぜ、按摩の笛が、北の方の辻から聞える。……ヤ、そんなに未だ夜は更けまいのに、屋根越の町一つ、恚う……田圃の畔かとも思ふ處でも吹いて居ら。」

と身忙しさうに片膝立てて、當所なく睜しながら、

「音は同じだが音が違ふ……女房さん、どれが、どんな顔の按摩だね。」

と聞く。……其時、白眼の座頭の首が、月に蒼ざめて覗きさうに、屋の棟を高く見た……目が

鋭い。

「あれ、あんた、鹿の雌雄ではあるまいし、笛の音で按摩の容子は分りませぬもの。」

「真個だ。」

と寂しく笑つた、波々注いだる茶碗の酒を、屹と見ながら、

「杯の月を酌まうよ、座頭殿。」と差俯いて獨言した。……が博多節の文句か、知らず、陰々として物寂しい、表の障子も裏透くばかり、霜の月の影冴えて、辻に、町に、按摩の笛、其の或ものは波に響く。

六

「や、按摩どのか。何んだ、唐突に驚かせる。……要らんよ、要りませぬ。」

と彌次郎兵衛。湊屋の奥座敷、此れが上段の間とも見える、次に六疊の附いた中古の十疊。障子の背後は直ぐに縁、欄干にすらりと硝子戸の外は、水煙渺として、曇らぬ空に雲かと思ふ、長

洲の端に星一つ、水に近く見らめいた、揖斐川の流れの裾は、潮を籠めた霧白く、月にも苦を伏

せ、蓑を乾す、繫船の帆柱が森差と垣根に近い。其處に燭臺を傍にして、火桶に手を懸け、怪訝

な顔して、

「はて、お早いお着きお草臥れ様で、と茶を一つ持つて出て、年増の女中が、唯今引込んだばかりの處。これから膳にもせう、酒にもせうと思ふ一寸の隙間へ、のそりと出した、あの面はえ？」

「はて、お早いお着きお草臥れ様で、と茶を一つ持つて出て、年増の女中が、唯今引込んだばかりの處。これから膳にもせう、酒にもせうと思ふ一寸の隙間へ、のそりと出した、あの面はえ？」



此の方、あの年増めを見送つて、入交つて来るは若いのか、と前髪の正面でも見ようと思へば、霜げた冬瓜に草鞋を打着けた、と言ふ異體な面を、襖の影から斜に出して、  
（按摩でやす。）と又、悪く抜衣紋で、胸を折つて、横坐りに、蠟燭火へ紙火屋のか、つた灯の向うへ、ぬいと半身で出た工合が、見越入道の御館へ、目見得の雪女郎を連れて出た、化の慶庵と言ふ體だ。

要らぬと言へば、黙然で、腰から前へ、板廊下の暗い方へ、スーと消えたり……怨敵、退散。」

と苦笑ひして、……床の正面に火桶を抱へた、法然天窓の、連の、其の爺様を見遣つて、

「捻平さん、お互に年は取りたくないね。些と三絃でも、とあるべき處を、お膳の前に按摩が  
出ますよ。……見くびつたものではないか。」

「兎角、其の年効ひもなく、旅籠屋の式臺口から、何んと、事も慇懃に出迎へた、家の隠居らし  
い切髪の婆様をじろりと見て、

（ヤヤ、難有い、佛壇の中に美婦が見えるわ、簀の子の天井から落ち度い。）などと、膝栗毛の書  
抜きを遣らつしやるで魔が魅すのぢや。屋臺は古いわ、造りも廣大。」

と丸木の床柱を下から見上げた。

「千年の桑かの。川の底も料られぬ。燈も暗いわ、獺も出ようず。些と懲りさつしやるが可い。」

「さん候、これに懲りぬ事なし。」

と奥齒のあたりを膨らまして微笑みながら、両手を懐に、胸を擴く、襖の上なる額を讀む。題  
して曰く、臨風榜可小樓。

「……とある、如何様な。」

「床に活けたは、白の小菊ぢや、一束にして摺みざし、喝采。」と讀める。

「いや、翁寂びた事を言ふわ。」

「それく、唯今懲りると言つた口の下から、何んぢや、其れは。やあ、見やれ、其許の袖口か  
ら、茶色の手の、もそくとした奴が、ぶらりと出たわ、揖斐川の獺の。」

「ほい、」

と視めて、

「南無三寶。」と、慌しく引込める。

「何んぢや其れは。」

「は、は、は、拙者うまれつき粗忽にいたして、よくものを落す處から、内の婆どのが計略で、  
手袋を、ソレ、ト左右糸で繫いだものさね。袖から胸へ潜らして、すいと引張つて両手へ嵌める



だ。何んと恐しからう。捻平さん、恠くまで身上を思うてくれる婆どのに對しても、無駄な祝儀は出せませんな。あ、南無阿彌陀佛。」

「狸めが。」

と背を圓くして横を向く。

「それ、年増が来る。祕すべし、祕すべし。」

で、手袋をたくし込む。

處へ女中が手を支いて、

「御支度をなさりますか。」

「いや、漸と、今草鞋を解いたばかりだ。泊めて貰ふから、支度はしません。」と眞面目に言ふ。

色は淺黒いが容子の可い、其の年増の女中が、これには妙な顔をして、

「へい、御飯は召あがりますか。」

「先づ酒から飲みます。」

「あの、めしあがりしますものは？」

「姉さん、此處は約束通り、焼蛤が名物だの。」

七

「其のな。焼蛤は、今も町はづれの葦簀張なんぞでいただきます。矢張り松毬で焼きませぬと美味うござりませんで、當家では蒸したのを差上げます、味淋入れて味美う蒸します。」

「は、あ、榮螺の壺焼と言つた形、大道店で遣りますな。……松並木を向うに見て、松毬のちよ

ろちよろ火、蛤の煙が此の月夜に立たうなら、丁と龍宮の田樂で、乙姫様が洒落に姉さんかぶりを遊ばさうと云ふ處、又一段の趣だらうが、故と其れがために忍んでも出られまい。……當家の

味淋蒸、其れが好からう。」

と小父者納得した顔して頷く。

「では、蛤でめしあがりしますか。」

「何？」と、故とらしく耳を出す。

「あのな、蛤であがりしますか。」

「いや、簀で食ひやせう、は、は、は。」

と獨で笑つて、懷中から膝栗毛の五編を一冊、ボンと出して、

「難有い。」と額を叩く。



女中も思はず噴飯して、

「あれ、あなたは彌次郎兵衛様でございますな。」

「其の通り。……此の度の参宮には、都合あつて五二館と云ふのへ泊つたが、内宮様へ参る途中、古市の旅籠屋、藤屋の前を通つた時は、前度いかい世話に成つた氣で、薄暗いまで奥深いあの店頭、眞鍮の獅吻火鉢がびか／＼とあるのを見て、略儀ながら、車の上から、帽子を脱いでお辭儀をして来た。が、町が狭いで、向う側の茶店の新姐に、此の小元を見せるのが辛かつたよ。」

と燈に向けて、てらりと光らす。

「ほゝ、ほゝ。」

「あはゝ。」

で捻平も打笑ふと、……此の機會に誘はれたか、——先刻二人が着いた頃には、三味線太鼓で、ト、ン、ヂヤカ／＼ぢやぢやぢやんと沸返るばかりだつた——丁度八ツ橋形に歩行板が架つて、土間を隔てた隣の座敷に、凡そ十四五人の同勢で、女交りに騒いだのが、今しがた按摩が影を見せた時分から、大河の汐に引かれたらしく、一時人氣勢が、遠くへ裾擴がりに茫と退いて、寂とした。たゞだゞつ廣い中を、猿が鳴きながら走廻るやうに、キヤ／＼とする雑妓の甲走つた聲が聞えて、重く、づつしりと、覆かぶさる風に、何を話すともなく多人數の物音のして居たのが、

此の時、洞穴から風が抜けたやうに哄と動揺めく。

女中も笑ひ引きに、すつと立つ。

「いや、此方は陰々として居る。」

「其の方が無事で可いの。」

と捻平は火桶の上に脊くゞまつて、其處へ投出した膝栗毛を差覗き、

「しかし思ひつきぢや、私は何うも此の寝つきが悪いで、今夜は一つ枕許の行燈で讀んで見ませう。」

「止しなさい、これを讀むと胸が切つて、尙ほ目が冴えて寝られなくなります。」

「何を言はつしやる、當事もない、膝栗毛を見て泣くものがあらうかい。私が事を言はつしやる、其許が餘程捻平ぢや。」

と言ふ處へ、以前の年増に、小女がついて出て、膳と銚子を揃へて運んだ。

「蛤は直きに出來ます。」

「可、可。」

「何よりも酒の事。」

捻平も、猪口を急ぐ。



「さて汝にも一つ遣らう。燭の可い處を一杯遣らつし。」と、彌次郎兵衛、酒飲みの癖で、些とぶるぶるする手に一杯傾けた猪口を、膳の外へ、其の膝栗毛の本の傍へ、疊の上に丁と置いて、  
「姉さん、一つ酌いで遣つてくれ。」  
と眞顔で言ふ。

小女が、きよとんとした顔を見ると、捻平に追つかけの酌をして居た年増が見向いて、  
「喜野、お酌ぎ……其の旦那はな、彌次郎兵衛様ぢやで、喜多八さんにお杯を上げなさんや。」  
と早や心得たものである。

八

小父者は何故か調子を沈めて、

「あ、能く言つた。俺を彌次郎兵衛は難有い。居心は可、酒は可。これで喜多八さへ一所だつたら、膝栗毛を正のもので、太平の民となる處を、さて、杯をさしたばかりで、恚う酌いだ酒へ、蠟燭の灯のちら／＼と映る處は、何うやら餓鬼に手向けたやうだ。あの又馬鹿野郎は何うして居る——」と膝に手を支き、疊の杯を凝と見て、陰氣な顔する。  
捻平も、不圖、此の時横を向いて腕組した。

「旦那、其の喜多八さんは何んでお連れなさんませんね。」

と愛嬌造つて女中は笑ふ。彌次郎寂しく打笑み、

「む、そりや何よ、其の本の本文にある通り、伊勢の山田ではぐれた奴さ。い、年をして娑婆氣な、酒も飲めば巫山戯もするが、世の中は道中同然。暖いにつけ、寒いにつけ、杖柱とも思ふ同伴の若いものに別れると、六十の迷兒に成つて、もし、此の邊に棚からぶら下がつたやうな宿屋はござりませんかと、賑かな町の中を獨りとぼ／＼と尋ね飽倦んで、もう落膽しやした、と云つてな、どつかり知らぬ家の店頭へ腰を落込んで、一服無心をした處……彼處を讀むと串戯ではない。……捻平さん、眞から以て涙が出ます。」

と言ふ、臉に映つて、蠟燭の火がちら／＼とする。

「姉や、心を切つたり。」

「はい。」

と女中が向うを向く時、捻平も目をしばた、いたが、

「や、あの騒ぎわい。」

と鼻の下を長くして、土間越の隣室へ傾き、

「豪いぞ、金盃まで持ち出いたわ、人間は皆裾が天井へ宙乗りして、疊を皿小鉢が踊るさうな。」



お、お、三味線太鼓が鎗を削つて打合ふ様子ぢや。」

「もし、お騒がしうござりませう、お氣の毒でござります。丁ど霜月でな、今年度の新兵さんが入營なさりますで、其の送別會ぢや言うて、彼方此方、皆、此の景氣でござります。でもな、お寝ります時分には時間に成るで静まりませう。何うぞ御辛抱なさいまして。」

「いや、其れには及ばぬ、其れには及ばぬ。」

と小父者、二人の女中の顔へ、等分に手を掉つて、

「却つて賑かで大きに可い。悪く寂寞して、又唐突に按摩に出られては弱るからな。」

「へい、按摩がな。」と何か知らず、女中も讀めぬ顔して聞返す。

捻平此の話を、打消すやうに咳して、

「さ、一獻參らう。何うぢや、此方へも酌人を些と頼んで、……え、それ何んとか言ふの。……

桑名の殿様時雨でお茶漬……とか言ふ、土地の唄でも聞かうではないかの。陽氣にな、くわつと一つ。旅の恥は掻棄てぢや。主はソレ叱言のやうな勸進帳でも遣らつしやい。

染めようにも髻は無いで、私はこれ、手拭でも疊んで法然天窓へ載せようでの。」と捻平が坐りながら腰を伸して高く居直る。と彌次郎眼を睜つて、

「や、平家以來の謀叛、其許の發議は珍らしい、二方荒神鞍なしで、真中へ乗りやせう。」

と夥しく景氣を直して、

「姉え、何んでも構はん、四五人木遣で曳いて來い。」

と肩を張つて大きに力む。

女中酌の手を差控へて、銚子を、膝に、と眞直に立てながら、

「さあ、今彼方の座敷で、もう一人二人言うて、お掛けやしたが、喜野、藝妓さんはあつたかな。」

小女が猪首で頷き、

「誰も居やはらぬ言うてでやんした。」

「かいな、旦那さん、お氣の毒さまでござります。狭い土地に、數のない藝妓やに依つて、恚うして會なんぞ立込みますと、目星い妓たちは、ちやつとの間に皆出拂ひます。然うか言うて、東京のお客様に、餘りな人も見せられはしませすな、容色が好いとか、藝がたぎつたとか言ふのでござりませぬとなあ……」

「いや、恚うなつては、宿賃を拂はずに、此方人等夜遁をするまでも、三味線を聞かなきや納まらない。眇、いぐちでない以上は、古道具屋からでも呼んでくれ。」

「待ちなさいまし。お、あの島屋の新妓さんなら屹と居るやろ。聞いて見や。喜野、ソレお急ぎぢや、廊下走つて、電話へ掛けや。」



「持つて来い、さあ、何んだ風車。」  
 急に勢の可い聲を出した、饅飩屋に飲む博多節の兄哥は、霜の上の燗酒で、月あかりに直ぐ醒める、色の白いのも其まゝであつたが、二三杯、叩切の茶碗酒で、目の縁へ、颯と酔が出た。  
 「勝手にピーク吹いて居れ、でんく太鼓に笙の笛、此方あ小兒だ、なあ、阿媽。……いや、女房さん、其れにしても何かね、御當處は、此の桑名と云ふ所は、按摩の多い所かね。」と笛の音に瞳がちらつく。

「あんたもな、按摩の日は囁や云ひます。名物は蛤ぢやもの、別に何も、多い譯はないけれど、こゝは新地なり、旅籠屋のある町やに因つて、つい、あの衆が、彼方此方から稼ぎに来るわな。」  
 「然うだ、成程新地だつた。」と何故か一人で納得して、氣の抜けたやうな片手を支く。

「お師匠さん、あんた、これから其の音聲を藝妓屋の門で聞かしてお見やす。眞個に、人死が出來ようも知れぬぜな。」と襟の處で、塗盆をくるりと廻す。

「飛んだ合せかゞみだね、人死が出來て堪るものか。第一、藝妓屋の前へは、うつかり立てねえ。」  
 「何故え。」

「悪くすると敵に出會す。」と投首する。

「あれ、藝が身を助けると言ふ、……お師匠さん、あんた、藝妓ゆえの、お身の上かえ。……眞個にな、仇だすな。」

「違つた！ 藝者の方で、私が敵さ。」

「あれ、のけく〜と、あんな憎いこと言ひなさんす。」と言ふ處へ、月は片明りの向う側。狭い町の、ものの氣勢にも暗い軒下を、からころ、からころ、駒下駄の音が、土間に浸込むやうに響いて来る。……と直ぐ其の足許を潛るやうに、按摩の笛が寂しく聞える。

門附は屹と見た。

「噂をすれば、藝妓はんが通りまつせ。あんた、見たいなら障子を開けやす……其のかはり、敵打たれうと思つてな。」

「あゝ、何時でも打たれて遣ら。ちよッ、可厭に煩く笛を吹くない。」  
 かたりと門の戸を外から開ける。

「えゝ、吃驚すら。」

「今晚は、——饅飩六ツ急いでな。」と草履穿きの半纏着、背中へ白く月を浴びて、赤い鼻をぬいと出す。



「へい」と筒抜けの高調子で、亭主帳場へ棒に突立ち、

「お方、そりや早うせぬかい。」

女房は澄ましたもので、

「美しい聲音やな、何處の？」と聞く。

「こなひだ山田の新町から住替へた、こんの島家の新妓ぢや。」と言ひながら、鼻赤の若い衆は、覗いた顔を外に曲げる。

と門附は、背後の壁へ胸を反らして、一寸伸上るやうにして、戸に立つ男の肩越しに、皎とした月の廓の、細い通を見透かした。

駒下駄は些と音低く、未だ、からころと響いたのである。

「澤山出なさるかな。」

「まあ、こんの饅頭のやうには行かぬで。」

「其の氣で、すぐに届けますえ。」

「はい頼みます。」と、男は返る。

亭主帳場から背後向きに、日和下駄を探つて下り、がたりびしりと手當り強く、其處へ廣蓋を出掛ける。は、あ、夫婦二人の此の店、氣の毒千萬、御亭が出前持を兼ねると見えたり。

「裏表とも氣を注げるぢや、可いか、可いか。一寸道寄りをして來るで、可いか、お方。」

と其處等じろくと睨廻して、新地の月に提灯入らず、片手懐にしたなりで、亭主が出前、ヤ

ケにがつと戸を開けた、後を閉めないで、ひよこく出て行く。

笠の湯氣が颯と分れて、門附の頬に影がさした。

女房横合から來て、

「何時まで、うつかり見送つてぢや、そんなに敵が打たれたいの。」

「女房さん、桑名ぢやあ……藝者の箱屋は按摩かい。」と慄氣としたやうに肩を細く、此の時漸と

居直つて、女房を見た、色が悪い。

十

「然うさ、如何に伊勢の濱狹だつて、按摩の箱屋と云ふのはなからう。私もなからうとは思ふが、

今向う側を何んとか屋の新妓とか云ふのが、からんころんと通るのを、何心なく見送ると、あの、

一軒おき二軒おきの、軒行燈では淺葱になり、月影では青くなつて、薄い紫の座敷着で、袴を蹴

出さず、ひつそりと、白い襟を俯向いて、足の運びも進まないやうに何んとかなく悄れて行く。……

……其の後から、鼠色の影法師。女の影なら月に地を這ふ筈だに、寒い道陸神が、のそくと四五



尺離れた處を、ずっと前方まで附添つたんだ。腰附、肩附、歩行く振、捏つちて附着けたやうな不恰好な天窓の工合、何う見ても按摩だね、盲人らしい、めんない千鳥よ。……私あ何んだ、だから、按摩が箱屋をすると云つちや可笑い、盲目に成つた箱屋かも知れないぜ。」

「どんな風の、どれな。」

と門へ出さうにする。

「いや、最う見えない。呼ばれた家へ入つたらしい。二人とも、ずっと前方で居なくなつた。然うか。あ、盲目の箱屋は居ねえのか。ア又殖えたぜ……影がさす、笛の音に影がさす、按摩の笛が降るやうだ。此の寒い月に積つたら、桑名の町は針の山に成るだらう、堪らねえ。」

とぐいと呷つて、

「え、ヤケに飲め、一杯何うだ、女房さん附合ひねえ。御亭主は留守だが、明放しよ、……構ふものか。それ向う三軒の屋根越に、雪坊主のやうな山の影が覗いてら。」

と門を振向き、あ、と叫んで、

「来た、来た、来た、来やあがつた、来やあがつた、按摩々々、按摩。」

と呼吸も吐かず、続け様に急込んだ、自分の聲に、町の中に、ぬい、と立つて、杖を脚許へ斜交ひに突張りながら、目を白く仰向いて、月に小鼻を照らされた流しの按摩が、呼ばれたものと

心得て、其のまゝ凍附くやうに立留まつたのも、門附はよく分らぬ状で、

「影か、影か、阿媽、眞個の按摩か、影法師か。」

と激しく聞く。

「眞個なら、何うおしる。貴下、そんなに按摩さんが戀しいかな。」

「戀しいよ！ あ、」

と呼吸を吐いて、見直して、眉を擡めながら、聲高に笑つた。

「は、は、は、按摩にこがれて此の體さ。お、按摩さん、按摩さん、さあ入つてくんねえ。」

門附は、撥を除けて、床几を叩いて、

「一つ頼まう。女房さん、濟まないが一寸借りるぜ。」

「此の疊へ来て横にお成りな。按摩さん、お客だす、あとを閉めておくんなさい。」

「へい。」

コト／＼と杖の音。

燈行歌

「え、……丁と早や、影法師も同然なもので。」と掠れ聲を白く出して、黒いけんちう羊羹色の被布を着た、燈の影は、赤く其の皺の中へさし込んだが、日和下駄から消えても失せず、片手を泳ぎ、片手で酒の香を嗅分けるやうに入つた。



「聞えたか。」

と此の門附、權のあるものいひで、五六本銚子の並んだ、膳を又傍へずらす。

「へ、へ」と一寸鼻をす、つて、ふん、とけなりさうに香を嗅ぐ。

「待ちこがれたもんだから、戸外を犬が走つても、按摩さんに見えたのさ。任う、悪く言ふんぢやないぜ……其處へぬつくりと顯れたらう、酔つて居る、幻かと思つた。」

「眞個に待兼ねて居なかつたえ。あの、笛の音ばかり氣にしなさるので、私も何うやら解めなんだが、漸と分つたわな、何んともお待遠でござんしたの。」

「これは、おかみさま、御繁昌。」

「お客はお一人ぢや、ゆつくり療治してあげておくれ。其れなりにお寢つたら、お泊め申さう。」と言ふ。

按摩どの、けろりとして、

「え、其の氣で、念入りに一ツ、摺りませうで。」と我が手を握つて、拉ぐやうに、ぐいと揉んだ。

「へい、旦那。」

「旦那ぢやねえ。ものもらひだ。」と又呷る。

女房が竊と睨んで、

「滅相な、あの、言ひなさる。」

十一

「いや、横になる處ぢやない、澤山だ、此處で澤山だよ。……第一背中へ摺られて、一呼吸でも應へられるか何うだか、實は其れさへ覺束ない。悪くすると、其のまゝ、目を眩して打倒れようも知れんのさ。體よく按摩さんに摺み殺されると云つた形だ。」

と眞顔で言ふ。

「飛んだ事をおつしやりませ、田舎でも、これでも、長年年期を入れました杉山流のものでござります。鳩尾に鍼をお打たせになりましたも、決して間違ひのあるやうなものではござりませぬ。」と呆れたやうに、按摩の剝く目は蒼かりけり。

「うまい、まづいを言ふのぢやない。何時の幾日にも何時にも、洒落にもな、生れてから未だ一度も按摩さんの味を知らないんだよ。」

「まあ、あんなにあんた、こがれなかつた癖に。」

「そりや、張つてく仕様がなから、目にちらつくほど待つたがね、いざ……と成ると初産です、灸の皮切も同じ事さ。何うにも勝手が分らない。痛いんだか、痒いんだか、風説に因ると擦



つたいとね。多分私も擦つたからうと思ふ。……處が生憎、母親が操正しく、是でも密夫の兒ぢやないさうで、其の擦つたがりやう此の上なし。……あれ、あんなあの、握飯を拵へるやうな手附をされる、と其の手で揉まれるかと思つたばかりで、最う堪らなく擦つたい。何うも、あゝ、こりや不可え。」

と脇腹へ兩腕を、しつかりついて、搔竦むやうに脊筋を捻る。

「はゝゝはゝ、これは何うも。」と按摩は手持不沙汰な風。

女房更めて顔を覗いて、

「何んと、まあ、可愛らしい。」

「同じ事を、可哀相だ、と言つてくんねえ。……然うかと言つて、恚う張つちや、身も皮も石に成つて固りさうな、背が詰つて胸は裂ける……揉んで貫はなくては遣切れない。遣れ、構はない。」

と激しい聲して、片膝を屹と立て、

「殺す氣で蒐れ。此方は覺悟だ、さあ。ときに女房さん、袖摺り合ふのも他生の縁ツさ。旅空掛けて恚うしたお世話を受けるのも前の世の何かだらう、何んだか、おなごりが惜いんです。擱殺されりや其切だ、最一つ憚りだがついでおくれ、別れの杯に成らうも知れん。」

と筆を切つて、ついと出すと、他愛なさも餘りな、目の色の變りやう、眦も屹と成つたれば、

女房は氣を打たれ、默然で唯目を睜る。

「さあ按摩さん。」

「えゝ、」

「女房さん酌いどくれよ！」

「はあ、」と酌をする手が些と震へた。

此の茶碗を、一息に仰ぎ干すと、按摩が手を掛けたのと一緒であつた。

がたくと身震ひしたが、面は幸に紅潮して、

「あゝ、腸へ沁透る！」

「何か其の、何事か存じませぬが、按摩は大丈夫でござります。」と、これもおどつく。

「先づ、」

と突張つた手をぐたりと緩めて、

「生命に別條は無ささうだ、しかし、しかし應へる。」

とがつくり俯向いたのが、ふらくした。

「月は寒し、炎のやうな其の指が、火水と成つて骨に響く。胸は冷たい、耳は熱い。肉は燃える、血は冷える。あつ、」と言つて、兩手を落した。



吃驚して按摩が手を引く、其の嘴や鱗に似たり。  
 兄哥は、確乎起直つて、

「いや、手をやすめず遣つてくれ、あはれと思つて靜に……よしんば徐と揉まれた處で、私は五體が碎ける思ひだ。

其の思ひをするのが可厭さに、種々に惱んだんだが、避ければ摺着く、過ぎれば引張る、逃げれば追ふ。形が無ければ弾がする……パイ／＼笛は攻太鼓だ。恚う犇々と寄着かれちや、弱いものには我慢が出来ない。淵に臨んで、岨の上に蹴下ろして踏留まる膽玉のないものは、一層の思ひ、眞逆に飛込みます。破れかぶれよ、按摩さん、従兄弟再従兄弟か、伯父甥か、親類なら、さあ、敵を取れ。私はね、……お仲間の按摩を一人殺して居るんだ。」

## 十二

「今から丁ど三年前。……其の年は、此の月から一月後の師走の末に、名古屋へ用があつて来た。序と言つては悪いけれど、稼の繰廻しが何うにか附いて、參宮が出来ると言ふのも、お伊勢様の思召、冥加のほど難有い。ゆつくり古市に逗留して、其れこそ次手に、……淺熊山の雲も見よう、鼓ヶ嶽の調も聞かう。二見ぢや初日を拜んで、塚橋から、池の浦、沖の島で空が別れる、上郡か

ら志摩へ入つて日和山を見物する。……海が風いだら船を出して、伊良子ヶ崎の海鼠で飲まう、何でも五日六日は逗留と云ふつもりで。……山田では尾上町の藤屋へ泊つた。驚くべからず——まさか其の時は私だつて、浴衣に給ぢや居やしない。

着換へに紋付の一枚も持つた、綺で襲衣の若旦那さ。……ま、恚う、雲助が傾城買の昔を語る………負惜みを言ふのぢやないよ。何も自分の働きで然うした譯ぢやないのだから。——聞きねえ、親なり、叔父なり、師匠なり、恩人なりと言ふ、……私が稼業ぢや江戸で一番、日本中の家元の大黒柱と云ふ、少元の苦い面した阿父がある。

いや、其の顔色に似合はない、氣さくに巫山戯た江戸兒でね。行年其の時六十歳を、三つと刻んだはをかしいが、數へ年のサバを算んで、私が代理に宿帳をつける時は、天地人とか何んとか言つて、禪の問答をするやうに、指を三本、ひよいと出してギロリと睨む………五十七歳とかけと云ふのさ。可いかね、其の氣だもの………旅籠屋の女中が出てお給仕をする前では、阿父さんが大の禁句さ。……與一兵衛ぢやあるめえし、汝、定九郎のやうに呼ぶなえ、と唇を捻曲げて、叔父さんとも言はせねえ、兄さんと呼べ、との御意だね。

此の叔父さんのお供だらう。道中の面白さ。酒はよし、景色はよし、日和は續く。何處へ行つても女はふらない、師走の山路に、嫁菜が盛りで、然も大輪が咲いて居た。



と此の桑名、四日市、龜山と、伊勢路へ掛つた汽車の中から、おなじ切符の誰彼が——其の催についで名古屋へ行つた、私たちの、まあ……興行か……其の興行の風説をする。嘘にも何うやら、私の評判も可ささうな。叔父は固より……何事も言ふには及ばん。——私が口で饒舌つては、流儀の恥に成らうから、まあ、何某と言つたばかりで、世間は承知すると思つて、聞きねえ。處がね、其の私たちの事を言ふ次手に、此の伊勢へ入つてから、屹と一所に出る、人の名がある。可いかい、山田の古市に惣市と云ふ按摩鍼だ。」

門附は其の名を言ふ時、うつとりと瞳を据ゑた。背を抱くやうに背後に立つた按摩にも、床几に近く襦袢を投げて、向うに腰を掛けた女房にも、目もくれず、凝と天井を仰ぎながら、胸前にかかる湯氣を忘れたやうに手で捌いて、

「按摩だ、が其の按摩が、舊は然る大名に仕へた土族の果で、聞きねえ。私等が流儀と、同じ其の道の藝の上手。江戸の宗家も、本山も、當國古市に於て、一人で兼ねたり、と言ふ勢で、自から宗山と名告る天狗。高慢も高慢だが、また出来る事も出来る。……東京の本場から、誰も来て怯かされた。某も參つて拉がれた。あれで一眼でも有らうなら、三重縣に居る代物ではない。今度名古屋へ来た連中も然うぢや、質物ではなからうから、何も宗山に稽古をして貰へとは言はぬけれど、鰻の他に、鯛がある、味を知つて歸れば可い。——と才發けた商人風のと、でつぷり

した金の入齒の、土地の物持とも思はれる奴の話したのが、風説の中でも耳に付いた。

叔父はこくくく坐睡をして居たつけ。私あ若氣だ、襟巻で顔を隠して、睨むやうに二人を見たのよ、ね。

宿の藤屋へ着いてからも、故と、叔父を一人で湯へ遣り……女中にも一寸聞く。……挨拶に出た番頭にも、按摩の惣市、宗山と云ふ、これくした藝人が居るか、と聞くと、誰の返事も同じ事。思つたよりは高名で、現に、此の頃も藤屋に泊つた、何某侯の御隠居の御召に因つて、上下で座敷を勤た時、(さてもな、鼓ヶ嶽が近い所爲か、これほどの松風は、東京でも聞けぬ、)と御賞美。

(的等にも聞かせたい。)と宗山が言はれます、とちよろりと饒舌つた。私が夥間を——

(的等。)と言ふ。

的等の一人、愠く言ふ私だ……」

## 十三

## 燈行歌

「尚ほ聞けば、古市のはづれに、其の惣市、小料理屋の店をして、妾の三人もある、大した勢だ、と言ふだらう。——何を！……按摩の分際で、宗家の、宗の宇、斯の道の、本山が凄しい。



「怒う、按摩さん、舞臺の差は堪忍してくんな。」  
と、竊と痛さうに胸を壓へた。

「後で、能く気がつけば、信州のお百姓は、東京の芝居なんぞ、眞個の猪はないとて威張る。…  
…な、宮重大根が日本一なら、熊の千枚漬も皇國無双で、早く言へば、此の桑名の、焼蛤も三都  
無類さ。」

其の氣で居れば可いものを、二十四の前厄なり、若氣の一圖に苛々して、第一其の宗山が氣に  
入らない。(的等)もぐつと癪に障れば、妾三人で赫とした。

維新以來の世がはりに、…一時私等の稼業がすたれて、夥間が食ふに困つたと思へ。弓矢取  
つては一萬石、大名株の藝人が、イヤ楊枝を削る、かるめら焼を露店で賣る。…蕎麥屋の出前  
持に成るのもあり、現在私が其小父者などは、田舎の役場に小使ひをして、濁り酒のかすに酔つ  
て、田圃の畝に寝たもんです。…

其の妹だね、可い、私の阿母が、振袖の年頃を、困る處へ附込んで、小金を溜めた按摩め  
が、些とばかりの貸を枷に、妾にせう、と追ひ廻はす。——危く駒下駄を踏返して、駕籠でなく  
つちや見なかつた隅田川へ落ちようとしたつさ。——其の話にでも嫌ひな按摩が。  
え。

待て、見えない兩眼で、汝が身の程を明るく見るやう、療治を一つしてくれう。

で、翌日は謹んで、参拜した。

其の尊さに、其の晩ばかりは些との酒で宵寢をした、叔父の夜具の裾を叩いて、枕許へ水を置  
き、

(女中、其處等へ見物に、)

と言つた心は、穴を壓へて、宗山を退治る料簡。

と出た、風が荒い。荒いが此の風、五十鈴川で劃られて、宇治橋の向うまでは吹くまいが、相  
の山の長坂を下から哄と吹上げる…此が悪く生温くつて、灯の前ぢや砂が黄色い。月は雲の底  
に淀りして居る。神路山の樹は蒼くても、二見の波は白からう。酷い勢、ぱつと吹くので、たぢ  
たぢと成る。帽子が飛ぶから、其のまゝ、藤屋が店へ投返した…と脊筋へ孕んで、坊さんが忍  
ぶやうに羽織の袖が翻々する。着替へるのも面倒で、晝間のなりで、神詣での紋付さ。——袖疊  
みに懷中へ捻込んで、何の洒落にか、手拭で頬被りをしたもんです。

門附に成る前兆さ、状を見やがれ。」と片手を袖へ、二の腕深く突込んだ。片手で狙ふやうに茶  
碗を壓へて、

燈行歌

「ね、古市へ行くと、まだ宵だのに寂然して居る。…軒が、がたびしと鳴つて、軒行燈がぼッ



ばつ揺れる。三味線の音もしたけれど、吹さらはれて大屋根へ猫の姿でけし飛ぶやうさ。何の事はない、今夜の此の寂しい新地へ、風を持つて来て、打着けたと思へば可い。

一軒、地の些と窪んだ處に、溝板から直ぐに竹の欄干に成つて、毛氈の端は芻上り、疊に赤い島が出来て、洋燈は油煙に燻つたが、眞白に塗つた姉さんが一人居る、空氣銃、吹矢の店へ、ひよろりとして引掛つたね。

取着きに、肱を支いて、怪しく正面に眼の光る、悟つた顔の達磨様と、女の顔とを、七分三分に狙ひながら、

(此の邊に宗山ツて按摩は居るか)と此處で實は様子を聞く氣さ。押懸けて行かうたつて些とも勝手が知れないから。

(先生様かね、いらつしやります)と何と、(的等)の一人に、先生を、然も、様づけに呼ぶだらう。

(實は、其の人の何を、一つ、聞きたくつて来たんだが、誰が行つても頼まれてくれるだらうか。)と尋ねると、大鬘斗を書いた幕の影から、色の蒼い、鬢の亂れた、瘦せた中年増が顔を出して、

「知己のない、旅の方には何うか知らぬ、お望なら、内から案内して上げませうか。」と言ふ。茶代を奮發んで、頼むと言つた。

(案内して上げなはれ、可い旦那や、氣を付けて)と目配をする、……と雑作はない、其の塗つたのが、いきなり、欄干を跨いで出る奴さ。

十四

「兩袖で口を塞いで、風の中を俯向いて行く。……其の女の案内で、つい向う路地を入ると、何處も吹附けるから、戸を鎖したが、怪しげな行燈の燭つて見える、ごたくした兩側の長屋の中に、溝板の廣い、格子戸造りで、此の一軒だけ二階屋。

軒に、御手輕御料理としたのが、宗山先生の住居だつた。

(お客様)と云ふ女の送りで、づつと入る。直ぐ其處の長火鉢を取巻いて、三人ばかり、變な女が、立膝やら、横坐りやら、猫板に頬杖やら、料理の方は隙らしい。……上櫃の正面が、取着きの狭い階子段です。

(座敷は二階かい)と突然頬被を取つて上らうとすると、風立つので燈を置かない。眞暗だから一寸待つて、と色めいてざわつき出す。と其の拍子に風のなぐれで、奴等の上の釣洋燈がばつと消えた。

燈行歌

其處へ、中仕切の障子が、次の室の燈にほのめいて、二枚見えた。眞中へ、ばつと映つたのが、



大坊主の額の出た、唇の大きい影法師。む、宗山め、居るな、と思ふと、憎い事には……影法師の、其の背中に掴まつて、坊主を揉んでるのが華奢らしい島田鬘で、此の影は、濃く映つた。

火燧々々、と女どもが云ふ内に、

(えへん)と咳を太くして、大な手で、灰吹を所持上げたのが見えて、離れて煙管が映る。——  
最う一倍、其の時圖體が擴がつたのは、袖を開いたらしい。此奴、寢ん寢子の廣袖を着て居る。

漸と臺洋燈を點けて、

(お待遠でした、さあ、)

つて二階へ。吹矢の店から送つて来た女はと、中段から一寸見ると、兩膝をつしりと、其處に居た奴の背後へ火鉢を離れて、俯向いて坐つた。

(あの娘で可いのか、他にもござりますよつて。)

と六疊の表座敷で低聲で言ふんだ。——は、あ、商賣も大略分つた、と思ふと、其奴が、

(お誂は。)

と大な聲。

(あつさりしたもので一寸一口。其處で……)

實は……御主人の按摩さんの、咽喉が一つ聞きたいのだ、と話した。

(咽喉?)……と其奴がね、異に蔑んだ笑ひ方をしたものです。

「先生様の……でござりまするか、早速然う申しませう。」

で、地獄の手曳め、急に衣紋繕ひをして下りる。少時して上つて来た年紀の少い十六七が、……こりや何うした、よく言ふ口だが芥溜に水仙です、鶴です。帯も襟も唐縮緬ぢやあるが、もみぢのやうに美しい。結綿のふつくりしたのに、淺葱鹿の子の絞高な手柄を掛けた。やあ、三人あると云ふ、妾の一人か。お、ん神の、お膝許で沙汰の限りな! 宗山坊主の背中を揉んでた島田鬘の影らしい。惜しや、五十鈴川の星と澄んだ其の目許も、鯨の鰭で濁らう、と可哀に思ふ。此の娘が紫の袱紗に載せて、薄茶を持つて来たんです。

いや、御本山の御見識、其の咽喉を聞きに来たと成ると……客に先づ袴を穿かせる仕向をするな、眞劍勝負面白い。で、此方も勢、懷中から羽織を出して着直したんだね。

やがて、又持出した、杯と云ふのが、朱塗に二見ヶ浦を金蒔繪した、杯臺に構へたのは凄からう。

(先づ一ツ上つて、此方へ。)

と按摩の方から、此の杯の指圖をする。其の工合が、謹んで聞け、と云つた、頗る權高なものさ。どかりと其處へ構へ込んだ。其の容子が膝も腹もつんぐりして、胴中ほど咽喉が太い。耳の傍



から眉間へ掛けて、小蛇のやうに筋がぬぐる。眉が薄く、鼻がひしやげて、ソレ其の唇の厚い事、お刺に頬骨がギシと出て、齒を噛むとガチ／＼と鳴りさう。左の一眼べとりと盲ひ、右が白眼で、ぐるりと翻つた、然も一面、念入の黒痘瘡だ。  
が、争はれないのは、不具者の相格、肩つきばかりは、みじめらしく悄乎して、猪の熊入道もがつくり投首の抜衣紋で居たんだよ。」

十五

「否な、何も私が意地悪を言ふわけではないえ。」  
と湊屋の女中、前垂の膝を堅くして——傍に柔かな髪の毛の房りした島田の鬘を重さうに差俯向く……襟足白く冷たさうに、水紅色の羽二重の、無地の長襦袢の肩が辻つて、寒げに脊筋の抜けるまで、嫺やかに、打消れた、残んの嫁茶花の薄紫、浅葱のやうに目に淡い、藤色縮緬の二枚着で、姿の寂しい、二十ばかりの若い藝者を流盼に掛けつ、  
「此のお座敷は貰うて上げるから、なあ和女、最うちやつと内へお去にや。……島家の、あの三重さんやな、和女、お三重さん、お歸り！」  
と屹と言ふ。

「お前さんがおいでやで、ようお客さんの御機嫌を取つてくれるであらうと、小女ばかり附けて置いて、私が勝手へ立違うて居る中や、……勿體ない、お客たちの、お年寄なが氣に入らぬか、近頃山田から来た言うて、此方の私の許を見くびつたか、酌をせい、と仰有つても、浮々とした顔はせず……三味線聞かうとおつしやれば、鼻の頭で笑うたげな。傍に居た喜野が見兼ねて、私の袖を引きに来た。」

先刻から、あゝ、恚うと、口の酸くなるまで、機嫌を取るやうにして、私が和女の調子を取つて、よしこの一つ上方唄でも、何うぞ三味線の音をさしておくれ。お客様がお寂しげな、座敷が浮かぬ、お見やんせ、蠟燭の灯も白けると、頼むやうにして聞かいても、知らぬ、知らぬ、と言通す。三味線は和女、禁物か。下手や言うて、知らぬ云うて、曲なりにもお座つき一つ弾けぬ藝妓が何處にある。

よう、思うてもお見。平の座敷か、其でないか。貴客がたのお人柄を見りや分るに、何で和女、勤める氣や。私が濟まぬ。さ、お立ち。えゝ、私が箱を下げて遣るから。  
と優しいのがツンと立つて、襖際に横にした三味線を邪険に取つて、衝と縦様に引立てる。

「あゝ、れ、  
はつと裳を摺らして、取絶るやうに、女中の膝を竊と抱き、袖を引き、三味線を引留めた。お



三重の姿は崩る、如く、芍薬の花の散るに似て、

「堪忍して下さいまし、勘忍して、勘忍して、」と、呼吸の切れる聲が濕んで、

「お客様にも、此のお内へも、な、何で私が失禮しませう。眞個に、あの、眞個に三味線は出来ませんもの、姉さん、」

と言が途絶えた。……

「今しがたも、な、他家のお座敷、隅の方に坐つて居ました。不斷ではない、兵隊さんの送別會、大陽氣に騒ぐのに、藝のないものは置かん、衣服を脱いで踊るんなら可、可厭なら下げると……私一人歸されて、主人の家へ戻りますと、直ぐに酷いめに逢ひました、え。」

三味線も弾けず、踊りも出来ぬ、座敷で衣物が脱げないなら、内で脱げ、引剥くと、な、帯も何も取られた上、臺所で突伏せられて、引窓を故と開けた、寒いお月様のさす影で、恥かしいなあ、柄杓で水を立續けて乳へも胸へもかけられましたの。

此方から、あの、お座敷を掛けて下さいますと、何うでせう、炬燵で温めた襦袢を着せて、東京のお客ぢやさうなと、な、取つて置きに着物を出して、能う勤めて歸れや言うて、御主人が手で、駒下駄まで出すんです。

勤めるたつて、何うしませう……踊は立つて歩行くことも出来ませんし、三味線は、其が姉さ

ん、手を當てれば誰にだつて、音のせぬ事はないけれど、弾いて聞かせとおつしやるもの、どうして私唄へます。……

不具でもないに情ない、調子が自分で出来ません。何を何うして、お座敷へ置いて頂けようと思ひますと、氣が怯けて氣が怯けて、口も満足利けませんから、何が氣に入らないで、失禮な顔をすると、お思ひ遊ばすのも無理はない、なあ。……

此のお家へは、お臺所で、洗ひ物のお手傳をいたします。姉さん、え、姉さん。」

と袖を擦つて、一生懸命、うるんだ目許を見得もなく、仰向けに成つて女中の顔。……色が見る見る柔いで、突いて立つた三味線の棹も撓みさうに成つた、と見ると、二人の客へ、向直つた、ふつくりとある綾の帯の結目で、尙ほ其の女中の袂を壓へて。……

十六

お三重は、而して、更めて二箇の老人に手を支いた。

「藝者で呼び遊ばした、と思ひますと……お役に立たず、極りが悪うございまして、お銚子を持ちますにも手が震へてなりません。下婢をお傍へお置き遊ばしたとお思ひなさいまして、お休みにになりますまでお使ひなすつて下さいまし。お背中を敲きませう、な、何うぞな、お肩を揉ま



して下さいまし。其なら一生懸命に屹と精を出します。」

と惜気もなく、前髪を疊につくまで平伏した。三指づきの折かゞみが、こんな中でも、打上る。本を開いて、道中の繪をじろくと黙つて見て居た捻平が、重くるしい口を開けて、

「子孫末代よい意見ぢや、旅で藝者を呼ぶなどは、なう、お互に以後謹まう……」と火箸に手を置く。

所在なささうに半眼で、正面に臨風榜可小樓を仰ぎながら、程を忘れた巻苺、此時、口許へ火を吸つて、慌てて灰へ抛つて、彌次郎兵衛は一つ咽せた。

「え、いや、女中、……追つて祝儀はする。此處でと思ふが、其の娘が氣が詰らうから、何處か小座敷へ休まして皆で饅飴でも食べてくれ。私が驕る。で、何か面白い話をして遊ばして、聴いて可い時分に歸すが可い。」と冷くなつた猪口を取つて、寂しさうに衝と飲んだ。

女中は、これよりさき、支いて突立つた其の三味線を、次の室の暗い方へ密と押遣つて、がっくりと筋が萎えた風に、折重なるまで摺寄りながら、黙然りて、燈の影に水の如く打揺ぐ、お三重の背中を擦つて居た。

「島屋の亭が、そんな酷い事をしをるかえ。可いわ、内の御隠居に然う言うて、沙汰をして上げよう。心安う思つておいで、眞個にまあ、よう和女、顔へ疵もつけんの。」

と、かよわい腕を撫下ろす。

「あ、其も賣物ぢや言ふだけの斟酌に違ひないな。……お客様に禮言ひや。さ、而して、何かを話しがてら、御隠居の炬燵へおいで。切下髪に頭巾被つて、丁度な、羊羹切つて、茶を食べてや。」

けども、

とお三重の、其の清らかな襟許から、優しい鬚毛を差覗くやうに、右瞻左瞻で、

「和女、因果やな、眞個に、三味線は弾けぬかい。ペンともシヤンとも。」

で、故と慰めるやうに吻々と笑つた。

人の情に溶けたと見える……氷る涙の玉を散らして、はつと泣いた聲の下で、

「はい、願掛けをしまして、鹽斷ちまでしましたけれど、何うしても分りません、調子が一つ出来ません。性來でござんせう。」

師走の闇夜に白梅の、面を蠟に照らされる。

「踊もかい。」

「は……い、」

「泣くな、弱蟲、さあ一つ飲まんか！ 元氣をつけて。向後何處へか呼ばれた時は、怯えるなよ。」



氣の持ちちやうで何うにも成る。ジャカ／＼と引鳴らせ、絲瓜の皮で搔廻すだ。琴も胡弓も用はない。銅鑼鑊を叩けさ。簫の笛をピイと遣れ、上手下手は誰にも分らぬ。其なら藝なしとは言はれまい。踊が出来ずば體操だ。一、

と左右へ、羽織の紐の断れるばかり大手を擴げ、寛濶な胸を反らすと、

「二よ。」と、庄屋殿が鐵砲二つ、ぬいと前へ突出いて、勵ます如く呵々と彌次郎兵衛、

「これ、其の位な事は出来よう。いや、其も度胸だな。見た處、其のやうに氣が弱くては、如何な事も遣つけられまい、可哀相に。」と聲が掠れる。

「あの……私が、自分から、言ひます事は出来ませんが、お恥しいのでございますが、舞の眞似が少しばかり立てますの、其も唯一ツだけ。」

と云ふ顔を俯向けて、恥かしさうに又手を支く。

「舞へるかえ、舞へるのかえ。」

と女中は嬉しさうな聲をして、

「お、踊や言うで明かんのぢや。舞へるのなら立つておくれ。此のお座敷、遠慮は入らん。待ちなはれ、地が要らう。これ喜野、彼處の廣間へ行つてな、内の千が然う言うたて、誰でも彈けるのを借りて來やよ。」

とぼんとして居た小女の喜野が立たうとする、と、名告つたお千が、打傾いて、優しく口許を一寸曲げて傾いて、

「待つて、待つて、」

十七

「平時と違ふ。……一度軍隊へ行きなされると、日曜でなうては出られぬ、……お國の爲やで、馴れぬ苦勞もしなさんす。新兵さんの送別會や。女衆が大勢居ても、一人抜けてもお座敷が寂しくなるもの。」

「可いわ、旅の恥は搔棄てを反對なが、一泊りのお客さんの前、私が三味線を搔廻さう。お三重さん、立つのは何？ 有るものか、無いものか言ふも行過ぎた……有るものとして無いけれど、何うにか間に合はせたいものではある。」

「あら、姉さん。」

と、三味線取りに立たうとした、お千の膝を、袖で壓へて、些とはなじろんだ、お三重の愛嬌。「絲に合ふなら踊ります。あのな、私のはな、お能の舞の眞似なんです。」と、言ひも果てず、お千の膝に顔を隠して、小父者と捻平に背向に成つた初々しさ。包ましかかな姿ながら、身を揉む



姿の着崩れして、袖を離れて疊に長い、襦袢の袖は媚かしい。

何、其の舞を舞ふのかい。」と彌次郎兵衛は一言云ふ。

「捨平膝の本をばつたり伏せて、

さて、飲まう。手酌でよし。此處で舞などは願ひ下げぢや。せめてお題目の太鼓にさつしやい。

ふあは、と何故か皺枯れた高笑ひ、此の時ばかり天井に哄と響いた。

「捨平さん、捨さん。」

「お、」

と不性に漸と應へる。

「何も道中の話の種ぢや、一寸見物をしようと思ふね。」

「先づ、ご免ぢや。」

「然らば、其許は目を瞑るだ。」

「え、縁起の悪い事を言はさる。……明日にも江戸へ歸つて、可愛い孫娘の顔を見るまでは、

死んでもなかく、目は瞑らぬ。」

「さて、捨るわ、ソレ其處が捨平さね。勝手になされ。さあ、あの娘立つたり、此の爺様に遠慮は入らぬぞ。それ、何にも藝がないと云うて肩腰さすらうと卑下をする。どんな真似でも一つ

遣れば、立派な藝者の面目が立つ。祝儀取るにも心持が可からうから、是非見たい。が、しかし心のまゝにしなよ、決して勤を強ひるぢやないぞ。」

「あんなに仰有つて下さるもの。さあ、どんな事するのや知らんが、まづうても大事な、大事な、それ、支度は入らぬかい。」

「あい、」

と僅かに身を起すと、紫の襟を噛むやうに——ふつくりしたのが、あはれに窶れた——

頤深く、恥かしさうに、内懷を覗いたが、膚身に着けたと思はる、……胸や、白き衣紋を

透かして、濃い紫の細い包、袱紗の縮緬が驟然と翻ると、燭臺に照つて、颯と輝く、銀の地の、

あゝ、白魚の指に重さうな、一本の舞扇。

是然とあるのを押頂くやう、前髪を掛けて、扇を其の、玉簪の如く額に當てたを、其のまゝ、折

目高にきりきりと、月の出汐の波の影、靜に照々と開くとともに、顔を隠して、反らした指のみ、

兩方親骨にちらりと白い。

又川口の汐加減、隣の廣間の人動揺めきが颯と退く。

唯見れば皎然たる銀の地に、黄金の雲を散らして、紺青の月、唯一輪を描いたる、扇の影に聲



「——其時あま人申様、もし此たまを取られたらば、此御子を世繼の御位になし給へと申しかば、子細あらじと領承し給ふ、扱て我子ゆるに捨ん命、露ほども惜からじと、千尋のなはを腰につけ、もし此玉をとり得たらば、此なはを動かすべし、其時人々からをそへ——」  
と調子が緊つて、

「……ひきあげ給へと約束し、一の利劍を抜持つて、」

と扇をきり、と袖を直す、と手練を見ゆる、自から、衣紋の位に年長けて、瞳を定めた其の顔硝子戸越に月さして、霜の川浪照添ふ倂、膝立据ゑた疊にも、燭臺の花颯と流るゝ。

「あゝ、待てい。」

と捻平、力の籠つた聲を掛けた。

十八

で、火鉢をすつと傍へ引いて、

「女中、も些とこれへ火をおくれ。いや、立つに及ばん。其の、鐵瓶をはづせば可し。」と捻平がいひつける。

此の場合なり、何となく、お千も起居に身體が緊つた。

靜に炭火を移させながら、捻平は膝をすらすと、革靴などは次の室へ……其だけ床の間に差置いた……車の上でも頸に掛けた風呂敷包を、重いもののやうに兩手で柔かに取つて、膝の上へ据ゑながら、お千の顔を除けて、火鉢の上へ片手を裏表かざしつゝ、

「あゝ、これ、お三重さんとか言ふの、其のお娘、手を上げられい。さ、手を上げて、」

と言ふ。……お三重は利劍で立たうとしたのを、慌しく捻平に留められたので、此の時まで、差開いた其の舞扇が、唇の花に霞むまで、俯向いた顔をひたと額につけて、片手を疊に支いて居た。恚う捻平に聲懸けられて、わづかに顔を振上げながら、きりきりと一先づ閉ぢると、其の扇を疊むに連れて、今まで、濁と瞳を張つて見据ゑて居た眼を、次第に塞いだ彌次郎兵衛は、ものも言はず、火鉢のふちに、ぶるゝと震ふ指を、と支えた態の、卷簾から、音もしないで、ほろほろと灰がこぼれる。

捻平座蒲團を一膝出て、

「いや、更めて、熟と、見せて貰はうぢやが、先づ此方へ寄りしやれ。えゝ、今の謡の、氣組みと、其の形。教へも教へた、さて、習ひも習うたの。」

恚うまで此を教ふるものは、四國の果にも他にはあるまい。あらかた人は分つたが、其となく音信も聞きたい。の、其許も黙つて聞かつしやい。」



と彌次が方に、捻平目遣ひを一つして、  
先づ、何うして、誰から、御身は習うたの。」

「はい、」

と弱々と返事した。お三重は最う、他愛なく娘に成つて、ほろりとして、

「あの、前刻も申しましたやうに、不器用も通越した、調子はづれ、其の上覚えが悪うござんして、長唄の宵や待ちの三味線のテンもツンも分りません。此の間まで居りました、山田の新町の姉さんが、朝と晝と、手隙な時は晩方も、日に三度づゝも、あの囁んで合めて、胸を割つて刻込むやうに教へて下さつたんでございませうけれど、自分でも悲しい。……曉の、ただけ十日かゝつて、漸と眞似だけ弾けますと、夢に成つて最う手が違ひ、心では思ひながら、三の手が一へ滑つて、とぼけたやうな音がします。」

撥で咽喉を引裂かれ、煙管で胸を打たれたのも、糸を切つた数より多い。

其も何も、邪険でするのではないのです。……私が、な、まだ其の前に、鳥羽の廓に居りました

時、……」

「あ、お前さんは、鳥羽のものかい、志摩だな。」

と彌次郎兵衛がフト聞入れた。

燈行歌

「否、私はな、矢張お伊勢なんですけれど、父さんが死なりましたから、繼母に賣られて行きましたの。はじめに聞いた奉公とは嘘のやうに違ひます。——お客の言ふこと聞かぬ言うて、陸で悪くば海で稼げつて、岨の下船着から、夜になると、男衆に捉へられて、小船に積まれて海へ出て、月があつても、島の蔭の暗い處を、危いなあ、ひやくする、木の葉のやうに浮いて歩行いて、寂とした海の上で……悲しい唄を唄ひます。而してお客の取れぬ時は、船頭衆の胸に響いて、女が戀しうなる禁厭ぢや、お茶挽いた罰や、と云つて、船から海へ、びしゃくど追下ろして、汐の干た巖へ上げて、巖の裂目へ俯向けに口をつけさして、(こいし、こいし)と呼ぼせます。若い衆は舳に待つて、聲が切れると、榮螺の殻をびしくと打着けますの。汐風が濡れて吹く、夏の夜でも寒いもの。……私の其は、師走から、寒の中で、八百八島あると言ふ、どの島も皆白い。霜風が凍りついた、巖の角は針のやうな、あの、其の上で、(こいし、こいし)つて、唇の、しびれるばかり泣いて居る。咽喉は裂け、舌は凍つて、潮を浴びた裙から冷え通つて、正體がなくなる處を、貝殻で引搔かれて、漸と船で正氣が付くのは、灯もない、何の船やら、あの、まあ、鬼の支いた棒見るやうな帆柱の下から、皮の硬い大な手が出て、引摺んで抱込みます。空には蒼い星ばかり、海の水は皆黒い。暗の夜の血の池に落ちたやうで、あ、生きて居るか……千鳥も鳴く、私も泣く。……お恥かしうござんす。」



と翳す扇の利劍に添へて、水のやうな袖をあて、顔を隠した其の風情。人は聲なくして、たゞ、ちり／＼と、蠟燭の涙白く散る。

此の物語を聞く人々、如何に日和山の頂より、志摩の島々、海の風、霞の池に鶴の舞ふ、あの、麗朗なる景色を見たるか。

十九

「泣いてばかり居ますから、氣の荒いお船頭が、こんな泣蟲を買ふほどなら、伊良子崎の海鼠を蒲團で、彌島の烏賊を遊ぶつて、何の船からも投出される。

又、あの巖に追上げられて、霜風の間々に、(こいし、こいし。)と泣くのでござんす。手足は凍つて貝になつても、(こいし)と泣くのが本望な。巖の裂目を沖へ通つて、海の果まで響いて欲しい。もう船も去ね、潮も来い。…其のまゝで石に成つてしまひたいと思ふほど、お客様、私は、あの、」

と亂れた襦袢の袖を銜へた、水紅色映る臉のあたり、ほんのりと薄くして、  
「心でばかり長い事、思つて居ります人があつて。…藝も容色もないものが、生意氣を云ふやうですが、…たとひ殺されても、死んでもと、心願掛けて居りました。

一晩も、矢張蒼い灯の船に買はれて、其の船頭衆の言ふ事を背かなかつたので、此方の船へ突返されると、艫の處に行火を跨いで、どぶろくを飲んで居た、私を送りの若い衆がな、玉代だけ損をしゃはれ、此方衆の見る前で、此の女を、海上にして慰まうと、月の良い晩でした。

胴の間で着物を脱がして、膚の紐へなはを付けて、倒に海の深みへ沈めます。づん／＼づんと沈んでな、最う奈落かと思ふ時、釣瓶のやうにきり／＼と、身體を車に引上げて、髪の手も切らせずに、又海へ突込みました。

此の時な、其の繋り船に、長崎邊の伯父が一人乗込んで居ると云うて、お小遣の無心に来て、泊込んで居りました、二見から鳥羽がよひの馬車に、馭者をします、寒中、襦衣一枚に袴服を穿いた若い人が、私のそんなにされるのが、餘り可哀相な、と然う云うて、伊勢へ歸つて、其の話をしましたので、今、あの申しました。…

此の間まで居りました、古市の新地の姉さんが、随分なお金子を出して、私を連れ出してくれましたの。

其でな、鳥羽の鬼へも面當に、藝をよく覚えて、立派な藝子に成れやツて、姉さんが、然うやつて、目に涙を一杯ためて、びし／＼撥で打ちながら、三味線を教へてくれるんですが、何うした因果か、此とも覚えられません。



人さしと、中指と、一寸の間を、一日に三度づゝ、一週間も鳴らしますから、近所隣も迷惑して、御飯もまづいと言ふのですえ。

又月の良い晩でした。あゝ、今の御主人が、深切なだけ尙ほ辛い。……何の、身體の切ない、苦しいだけは、生命が絶えれば其で済む。一層また鳥羽へ行つて、あの巖に擱まつて、(こいし、こいし)と泣かうか知らぬ、膚の紐になはつけて、海へ入れられるが氣安いやうな、と島も海も目に見えて、ふらくと月の中を、千鳥が、冥土の使ひに来て、連れて行かれさうに思ひました。……格子前へ流しが来ました。

新町の月影に、露の垂りさうな、あの、ちらく光る撥音で、

……博多帯しめ、筑前絞り——

と、何とも言へぬ好い聲で。

(へい、不調法、お喧しう)つて、其のまゝ行きさうにしたのです。

(あゝ、身震がするほど上手い、あやかるやうに拜んで來な、それ、お賽錢をあげる氣で。)

と瀧崎お召の半纏着て、灰に袖のつくほどに、しんみり聞いてやつた姉さんが、長火鉢の抽斗からお寶を出して、キイト、あの縷子が鳴る、帯へ挿んだ懷紙に捻つて、私に持たせなすつたのを、盆に乗せて、戸を開けると、もう一二間行きなさいます。二人の間にある月をな、影で繋いで、

で、ちやつと行つて、

(是喃。)と呼んで、出した盆を、振向いてお取りでした。私や、思はず其の手に絶つて、涙かひとりでに出来ました。男で居ながら、こんなにも上手な方があるものを、切めて其の指一本でも、私の身體についたらばと、つい、おろくと泣いたのです。

頬被をして居なすつた。あの其の、私の手を取つたまゝ——黙つて、少し脇の方へ退いた處で、(何を泣く)つて優しい聲で、其の門附が聞いてくれます。もう恥も何も忘れてな、其の、あの、何うしても三味線の覺えられぬ事を話しました。

二十

「よく聞いて、暫時熟と顔を見て居なさいました。

(藝事の出来るやうに、神へ願懸をすると云つて、夜の明けぬ内、外へ出る。鼓ヶ嶽の裾にある、雑樹林の中へ來い。三日とも思ふけれど、主人には、七日と頼んで。すぐ、今夜の明方から。……分つたか。若い女の途中が危い、此の入口まで来て待つて遣る、化されると思ふな、夢ではない。……)とお言ひのなり、三味線を胸に附着けて、フイと暗がりへ附着いて、黒塀を去きなさいます。



其の事は言はぬけれど、明方の三時から、夜の白むまで垢離取つて、願懸けすると頼んだら、姉さんは、喜んで、承知してくれました。

殺されたら死ぬ氣でな、——大恩のある御主人の、此の格子戸も見納めか、と思ふやうで、軒下へ出て振返つて、門を視めて、立つて居るとな。

(おいで、)

と云つて、突然、背後から手を取りなすつた、門附の其のお方。

私はな、よう覺悟はして居たが、天狗様に攫はれるかと思ひましたえ。

あとは夢やら現やら。明方内へ歸つてからも、其の後は二日も三日も唯茫として居りましたの。……鼓ヶ嶽の松風と、五十鈴川の流の音と聞えます、雑木の森の暗い中で、其の方に教はりました。……舞も、あの、さす手も、ひく手も、唯背後から背中を抱いて下さいますと、私の身體が、舞ひました。其れだけより存じません。

尤も、私が、あの、鳥羽の海へ投入られた、其の身の上も話しました。其の方は不思議な事で、私とは敵のやうな中だ事も、種々入組んでは居りますけれど、鼓ヶ嶽の裾の話は、誰にも言ふな、と口留めをされました。何んにも話がなりません。

五日目に、最う可いから、此を舞つて座敷をせい。藝なし、とは言ふまい、ツて、お記念なり、しるしなりに、此の舞扇を下さいました。

と袖で胸へ緊乎と抱いて、ぶる／＼と肩を震はした、後毛がはらりと成る。

捻平溜息をして頷き、

「いや、能く分つた。教へ方も、習ひ方も、話されずと能く分つた。時に、山田に居て、何うぢやな、其の舞だけでは勤まらなんだか。」

「はい、はじめて謡ひました時は、皆が、わつと笑ふやら、中には恐い怖いと云ふ人もござんす。何故言ふと、五日ばかり、あの私かな、天狗様に誘ひ出された、と風説したのでござんすから。」

「は、如何にも師匠が魔でなくては、其の立方は習はれぬわ。む、で、何かの、伊勢にも謡うたふものの、五人七人はあらうと思ふが、其の連中には見せなんだか。」

「え、物好に試すつて、呼んだ方もありましたか、地をお謡ひなさる方が、何ぢややら、些とも、ものに成らぬと言つて、すぐにお留めなさいましたの。」

「は、あ、いや、其の足拍子を入れられては、やはな話は断れて飛ぶぢやよ。は、は、は、唸る連中粉灰ぢやて。かた／＼此の桑名へ、住替へとやらしたのかの。」

「狐狸や、いや、あの、吠えて飛ぶ處は、梟の憑物がしよつた、と皆氣違にしなさいませ。姉



「さんも、手放すのは可哀相や言つて下さいましたけれど、……周囲の人が承知しませず、……此の桑名の島屋とは、行かひはせぬ遠い中でも、姉さんの縁續きでござんすから、預けるつもりで寄越されましたの。」

「お、其處で、又辛い思をさせられるか。先づ、其は後でゆつくり聞かう。……其のお娘、私も同一ぢや。天魔でなくて、若い女が、術をするはと、仰天したので、手を留めて濟まなんだ。さあ、立直して舞うて下さい。大儀ぢやらうが一さし頼む。私も久ぶりで可憐しい、御身の姿で、若師匠の御意を得よう。」

と言の中に、膝で解く、其の風呂敷の中を見よ。土佐の名手が畫いたやうな、紅い調は立田川、月の裏皮、表皮、玉の砧を、打つや、うつゝに、天人も聞けかしとて、雲井、と銘ある祕藏の塗洞。老の手捌き美しく、錦に梭を、投ぐるやう、さらりと緒を緊めて、火鉢の火に高く翳す、と……呼吸をのんで驚いたやうに見て居たお千は、思はず、はつと兩手を支いた。

藝の威嚴は争はれず、此の捻平を誰とかする、七十八歳の翁、邊見秀之進、近頃孫に代を譲つて、雪叟とて隠居した、小鼓取つて、本朝無雙の名人である。

いざや、小父者は能役者、當流第一の老手、恩地源三郎、即是。此の二人は、侯爵津の守が、參宮の、假の館に催された、一調の番組を勤め濟まして、あとを

膝栗毛で歸る途中であつた。

二十一

却説、饅飩屋では門附の兄哥が語り次ぐ。

「いや、其から、種々勿體つける所作があつて、やがて大坊主が謡出した。

聞くと、何うして、思つたより出来て居る、按摩鍼の藝ではない。……戶外をどツドと吹く風

の中へ、此の聲を打撒けたら、あのピーク、笛くらるに纏まらうと云ふもんです。成程、隨分夥

間には、此奴に(的等)扱ひにされようと言ふのが少くない。

が、私に取つちや小敵だつた。けれども藝は大事です、侮るまい、と氣を緊めて、其處で、膝を。」

と坐直ると、肩の按摩が上へ浮いて、門附の衣紋が緊る。

燈行歌

「……此の膝を丁と叩いて、黙つて二ツ三ツ拍子を取ると、此の拍子が尋常んぢやない。……親なり師匠の叔父きの膝に、小兒の時から、抱かれて習つた相傳だ。對手の節の隙間を切つて、伸縮みを緊めつ、緩めつ、聲の重味を刎上げて、咽喉の呼吸を突崩す。寸法を知らず、間拍子の分らない、満更の素人は、盲目聾で氣にはしないが、些と商賣人の端くれで、聊か心得のある對手



だと、トンと一つ打たれただけで、最う聲が引掛つて、節が不狀に蹴躓く。三味線の間も同一だ。何うです、意氣なお方に釣合はぬ……ン、と一ツ刎ねないと、野暮な矢の字が、とうふにかすがひ、糠に釘でぐしやりと成らあね。

さすがに心得のある奴だけ、商賣人にびたりと一ツ、拍子で聲を押伏せられると、張つた調子が直ぐにたるんだ。思へば餘計な若氣の過失、此方は畜生の淺猿しさだが、對手は素人の悲しさだ。

あはれや宗山。見る内に、額にたら／＼と衝と汗を流し、死聲を振絞ると、頤から胸へ膏を絞つた……あの其の大きな唇が海鼠を干したやうに乾いて来て、舌が硬つて呼吸が發奮む。わなわなと震へる手で、疊を掴むやうに、うたひながら猪口を拾はうとする處、ものの本を未だ一枚とうたはぬ前、ピシリと其處へ高拍子を打込んだのが、下腹へ響いて、ドン底から節が抜けたものらしい。

はつと火のやうな呼吸を吐く、トタンに眞俯向けに突伏す時、長々と舌を吐いて、犬のやうに疊を嘗めた。

(先生、御病氣か。)

つて私あ莞爾したんだ。

(是非聞きたい、平に何うか。宗山、此の上に尊に成つても、貴下のを一番、聞かすには死なれぬ。)

と拳を握つて、せい／＼言つてる。

(按摩さん。)

と私は呼んで、

(尾上町の藤屋まで、何のくらの離れて居る。)

(何んで、)

と聞く。

(間に依つては聲が響く、内證で来たんだ。……藤屋には私の聲が聞かしたくない、叔父が一人寝てござるんだ。勇士は霜の氣勢を知るとさ——唯さへ目敏い老人が、此の風だから寝苦しがつて、フト起きてでも居るとならない、祝儀は置いた。歸るぜ。)

ト宗山が、凝と塞いだ目を、ぐる／＼と動かして、

(暫く、今の拍子を打ちなされ……古市から尾上町まで聲が聞えようか、と言ひなされる、御大言、年のお少さ。まだ一度も聲は聞かず、顔は固より見た事もなければ……當流の大師匠、恩地源三郎どの養子と聞く……同じ喜多八氏の外にはあるまい。然やうでござらう、恩地、)



と私の名を丁と言ふ。

あゝ、酔つた、

と杯をばたりと落した。

「饒舌つて悪い私の名ぢやない。叔父に濟まない。二人とも、誰にも言ふな。……」

と鷹揚で、按摩と女房に目をあしらひ。

「私は羽織の裾を拂つて、

（違つたやうな、當つたやうだ、が、何しろ、東京の的等の一人だ。宗家の宗、本山の山、宗山

か。若布の附焼でも土産に持つて、東海道を這ひ上れ。恩地の臺所から音信れたら、叔父には内

證で、居候の腕白が、獨樂を廻す片手間に、此の浦船でも教へて遣らう。）

とすつと立つ。

二十二

「痘瘡の中に白眼を剥いて、よたくと立上つて、憤つた聲ながら、

（可憐いわ、若旦那、盲人の悲しさ顔は見えぬ。觸らせて下され、つかまらせて下され、一撫で、

撫でさせて下され。）

と言ふ。

いや、撫られて堪りますか。

摺抜けようとするんだがね、六疊の狭い座敷、盲目でも自分の家だ。

素早く、階子段の降口を塞いで、無手と、大手を擴げたらう。……影が天井へ懸つて、充滿の

黒坊主が、汗膏を流して撫でうとする。

いや、其の嫉妬執着の、險な不思議の形相が、今以て忘れられない。

（可厭だ、可厭だ、可厭だ。）と、此方は夢中に出ようとする、よける、留める、行違ふで、やは

な、かぐら堂の二階中みし〜と鳴る。風は轟々と當る。唯黒雲に捲かれたやうで、可恐しくな

つた、凄さは凄し。

衝と、引潜つて、ドンと飛び摺りに、どゞと駈け下りると、ね。

（袖や、止めませい。）

と宗山が二階で喚いた。皺枯聲が、風でばつと耳に當ると、三四人立騒ぐ女の中から、すつと

美しく姿を抜いて、格子を開けた門口で、しつかり攔まる。吹きつけて揉む風で、颯と紅い裊が

搦むやうに、私に絶つたのが、結綿の、其の娘です。

背中を揉んでた、薄茶を出した、あの影法師の妾だらう。

燈行歌



ものを言ふ清い、張のある目を上から見込んで、構ふものか、行きがけた。  
(可愛い人だな、おい、殺されても死んでも、人の玩弄物にされるな。)  
と言捨てに突放す。

(あれ。)と云ふ聲がうしろへ、ぱつと吹飛ばされる風に向つて、砂塵の中へ、や、躍込むやうにして一散に駈けて返つた。

後に知つた、が、妾ぢやない。お袖と云ふ其の可愛いのは、宗山の娘だつたね。其れを娘と知つて居たら、いや、その時だつて気が付いたら、按摩が親の仇敵でも、私あ退治るんぢやなかつたんだ。

と不意にがっくりと胸を折つて俯向くと、按摩の手が、肩を這つて、ぬいと越す。……其の袖の陰で、取るともなく、落した杯を探りながら、

「もしか、按摩が尋ねて來たら、堅く居らん、と言へ、と宿のものへ吩咐けた。叔父のすやくは、上首尾で、並べて取つた床の中へ、すつぱり入つて、引被つて、可心持に寝たんだが。

あ、寝心の好い思ひをしたのは、其晩切さ。

何故ツて、宗山が其の夜の中に、私に辱められたのを口惜しがつて、傲慢な奴だけに、ぴしりと、もろい折方、憤死して了つたんだ。七代まで流儀に祟る、と手探りでにじり書した遺書を

残してな。死んだのは鼓ヶ嶽の裾だつた。あの廣場の雜樹へ下つて、夜が明けて、漸ツと小止に成つた風に、ふらくとまだ動いて居たとさ。

此方は何にも知らなからう、風は風、天気は可。叔父は一段の上機嫌。……古市を立つて二見へ行つた。朝の中、朝日館と云ふのへ入つて、いづれ泊る、……先へ鳥羽へ行つて、ゆつくりしよう、と、直ぐに車で、上の山から、日の出の下、二見の浦の上を通つて、日和山を棧敷に、山の上に、海を青疊にして二人で半日。やがて朝日館へ歸る、……と何うだ。

旅籠の表は黒山の人の人だかりで、内の廊下もこつた返す。大袈裟な事を言ふんぢやない。伊勢から私たちに逢ひに來たのだ。按摩の變事と遺書とで、其の日の内に國中へ知れ渡つた。別に其の事について文句は申さぬ。藝事で宗山の留を刺したほどの豪い方々、是非に一日、山田で謡が聞かして欲しい、と羽織袴、フロックで押寄せたらう。

いや、叔父が怒るまいか。日本一の不所存もの、恩地源三郎が申渡す、向後一切、謡を口にするに罷成らん。立處に勘當だ。さて宗山とか云ふ盲人、己が不束なを知つて屈死した心、斯くの如きは藝の上の鬼神なれば、自分は、葬式の送迎、墓に謡を手向け、と人々と約束して、私其の場から追出された。

あとの事は何も知らず、其の時から、津々浦々をさすらひ歩行く、門附の果敢い身の上。



「名古屋の大須の観音の裏町で、これも浮世に別れたらしい、三味線一挺、古道具屋の店にあつたを工面したのははじまりで、一錢二錢、三錢ちや木賃で泊めぬ夜も多し、日數をつもると野宿も半分、京大阪と經めぐつて、西は博多まで行つたつけ。

何んだか伊勢が氣に成つて、妙に急いで、逆戻りに又來た。……

私が言つた唯一言、(人のおもちやに成るな)と言つたを、生命がけで守つて居る。……可愛い娘に逢つたのが一生の思出だ。

何う成るものでもないんだから、早く影をくらしましたが、四日市で煩つて、女房さん。」  
と呼びかけた。

「お前さんぢやないけれど、深切な人があつた。漸と足腰が立つたと思ひねえ。上方筋は何でもない、間違つて謠を聞いても、お百姓が、(風呂が沸いた)で竹法螺吹くも同然だが、東へ上つて、箱根の山のどてつばらへ手が掛ると、もう、な、江戸の鼓が響くから、何う我慢が成るものか！

うっかり謠をうたひさうで危くつて成らないからね、今切は越せません。これから大泉原、員辨、阿下岐をかけて、大垣街道。岐阜へ出たら飛驒越で、北國筋へも廻らうか知ら、と富田近所を三

日稼いで、桑名へ來たのが昨日だつた。

其の今夜は何うだ。不思議な人を二人見て、遣切れなくなつて此家へ飛込んだ。が、流の笛が身體に刺る。平時よりは尙ほ激しい。其處へ又影を見た。美しい影も見れば、可恐しい影も見た。此處で按摩が殺す氣だらう。構ふもんか、勝手にしろ、似たものを引つけて、と然う覺悟して按摩さん、背中へ摺つて貰つたんだ。

が、筋を抜かれる、身を撈られる、私が五體は裂けるやうだ。」

と又差俯向く肩を越して、按摩の手が、其れも物に震へながら、はたくと戦きながら、背中に獅噛んだ面の附着く……門附の袷の褪せた色は、膚薄な胸を透かして、動悸が筋に映るやう、あはれ、博多の柳の姿に、土蜘蛛一つ搦みついたやうに凄く見える。

「誰や！」

と、不意に吃驚したやうな女房の聲、うしろ見られる神棚の灯も暗くなる端に、べろりと紙が濡れて、門の腰障子に穴があいた。其れを見咎めて一つ喚く、とがたくと、蹙音高く、駈け退いたのは御亭どの。

いや、困つた親仁が、一人でない、薪雜棒、棒千切れで、二人ばかり、若いものを連れて居た。



「御老體、」

雪叟が小鼓を緊めたのを見て……恚う言つて、恩地源三郎が儼然として顧みて、

「破格のお附合ひ、恐多いな。」

と膝に扇を取つて會釋をする。

「相變らず未熟でござる。」

と雪叟が禮を返して、其のま、座を下へおりんとした。

「平に、其れは。」

「いや、蒲團の上では、お流儀に失禮ぢや。」

「は、其の娘の舞が、甥の奴の佛ゆるゑに、遠慮した、では私も、」

と言つた時、左右へ、敷物を齊しく匆ねた。

「嫁女、嫁女、」

と源三郎、二聲呼んで、

「お三重さんか、私は嫁と思ふぞ。喜多八の叔父源三郎ぢや、更めて一さし舞へ。」

二人の名家が屹と居直る。

瞳の動かぬ氣高い顔して、恍惚と見詰めながら、よろ／＼と引退る、と黒髪うつる藤紫、肩も

腕も嬌娜ながら、袖に構へた扇の利劍、霜夜に聲も凜々と、

「……引上げ給へと約束し、一つの利劍を抜持つて……」

肩に綾なす鼓の手影、雲井の洞に光さし、艶が添つて、名譽が籠めた心の花に、調の緒の色、

颯と燃え、ヤオ、と一つ聲が懸る。

「あつ、」

とばかり、屹と見据ゑた——能樂界の鶴なりしを、雲隠れつ、と惜まれた——恩地喜多八、饅

頭屋の床几から、衝と片足を土間に落して、

「雪叟が鼓を打つ！ 鼓を打つ！」と身を揉んだ、胸を切めて、慌しく取つて蔽うた、手拭に、か

つと血を吐いたが、かなぐり棄てると、右手を擱んで、按摩の手を緊乎と取つた。

「祟らば、祟れ、さあ、按摩。湊屋の門まで来い。最う一度、若旦那が聞かして遣らう。」

と、引立てて、すいと出た。

「源三郎……かくて龍宮に至りて宮中を見れば、其の高さ三十丈の玉塔に、彼玉をこめ置、

香花を備へ、守護神は八龍並居たり、其外惡魚鱗の口、遁れがたしや我命、さすが恩愛の故

郷のかたぞ戀しき、あの浪のあなたにぞ……」

爾時、漲る心の張に、島田の元結弗つと切れ、肩に崩る、緑の黒髪。水に亂れて、灯に揺めき、



豊の海は裳に澄んで、塵も留めぬ舞振かな。

〔源三郎〕……我子は有らん、父大臣もおはすらむ……」

と聲が幽んで、源三郎の地謡ふ節が、フト途絶えようとした時であつた。

此の湊屋の門口で、爽に調子を合はした。……其の聲、白き虹の如く、衝と来て、お三重の姿に射した。

〔喜多八〕……さるにても此のまゝに別れ果なんかなしさよと、涙ぐみて立ちしが……」

「やあ、大事な處、倒れるな。」

と源三郎すつと座を立ち、よろめく三重の背を支へた、老の腕に女浪の袖、此の後見の大磐石に、みるの縁の黒髪かけて、颯と翳すや舞扇は、銀地に、其の、雲も戀人の影も立添ふ、光を放つて、灯を白めて舞ふのである。

舞ひも舞うた、謡ひも謡ふ。はた雪叟が自得の祕曲に、桑名の海も、トトと大鼓の拍子を添へ、川浪近くタタと鳴つて、太鼓の響に汀を打てば、多度山の霜の頂、月の御在所ヶ嶽の影、鎌ヶ嶽、冠ヶ嶽も冠着て、客座に並ぶ氣勢あり。

小夜更けぬ。町凍てぬ。何處としもなく虚空に笛の聞えた時、恩地喜多八は唯一人、湊屋の軒の蔭に、姿蒼く、影を濃く立つて謡ふと、月が棟高く廂を照らして、渠の面に、扇のやうな光を

投げた。舞の扇と、うら表に、其處でびたりと合ふのである。

〔喜多八〕……又思切つて手を合せ、南無や志渡寺の観音薩埵の力をあはせてたび給へとて、

大悲の利劍を額にあて、龍宮に飛び入れば、左右へはつとぞ退いたりける。」

と謡ひ澄ましつゝ、

「背を貸せ、宗山。」と言ふとともに、恩地喜多八は疲れた状して、先刻から其の裾に、大きく何やら踞まつた、形のない、ものの影を、腰掛くるやう、取つて引敷くが如くにした。

路一筋白くして、掛行燈の更けた彼方此方、杖を支いた按摩も交つて、ちら／＼と人立ちする。



國貞忍かく



柳を植ゑた……其の柳の一處繁つた中に、清水の湧く井戸がある。……大通り四ツ角の郵便局で、東京から組んで寄越した若干金の爲替を請取つて、三ツ巻に包んで、ト先づ懷中に及ぶ。春は過ぎても、初夏の日の長い、五月中旬、午頃の郵便局は閑なもの。受附にも何の口にも他に立集ふ人は一人もなかつた。が、爲替は直ぐ手取早くは受取れなかつた。

取扱ひが如何にも氣長で、  
「金額は何ほどですか。差出人は誰でありますか。貴下が御當人なのですか。」

などと問伸のした、然も際立つて耳につく東京の調子で行る、……其の本人は、受取口から見た處、二十四五の青年で、羽織は着ずに、小倉の袴で、久留米らしい緋の袴、白い襦袢を首で留めた、肥つた腕の、肩の邊まで捲手で何とも以て忙しさうな、其の癖、する事は薩張抄らぬ。態に似合はず悠然と落着濟まして、聊か權高に見える處は、土地の士族の子孫らしい。で、其の尻上りの「ですか」を饒舌つて、時々じろくくと下目に見越すのが、田舎漢だと侮るなと言ふ態度

の、其れが明かに窓から見透く。郵便局員貴下、御心安かれ、受取人の立田織次も、同國の平民である。  
さて、局の石段を下りると、廣々とした四辻に立つた。

「さあ、何處へ行かう。」  
何處へでも勝手に行くが可、又何處へも行かないでも可い。此のまゝ、今度の歸省中轉がつて從姊の家へ歸つても可いが、其處は今しがた出て來たばかり。すぐに取つて返せば、忘れ物でもしたやうに思ふであらう。……先祖代々の墓詣は昨日済ますし、久しぶりで見たかつた公園も其の歸りに廻る。約束の會は明日だし、好きなものは晩に食べさせる、と從姊が言つた。差當り何の用もない。何年にも幾日にも、こんな暢氣な事は覺えぬ。おんぶするならしてくれ、で、些と他愛がないほど、のび／＼とした心地。

氣候は、と言ふと、ほか／＼が通り越した、これで赫と日が當ると、日中は早じり／＼と來さうな頃が、近山曇りに薄りと雲が懸つて、眞綿を日光に干すやうな、ふつくりと軽い暖かさ。午頃の蔭もさゝぬ柳の葉に、ふは／＼と柔い風が懸る。……其の柳の下を、駈けて通る腕車も見えず、人通りはちらほらと、都で言へば朧夜を浮れ出したやうな状態だけれども、此の土地では是でも賑な町の分。城趾のあたり中空で鳶が鳴く、と丁ど今が春の鰯を焼く匂がする。



飯を食べに行つても可、一寸珈琲に菓子でも可、何處か茶店で茶を飲むでも可、別にそれにも及ばぬ。が、袷に羽織で身は輕し、駒下駄は新しし、爲替は取つたし、まゝよ、若干金か貸しても可い。

「いや、申戲は止して……」

然うだ！ 小北の許へ行かねば成らぬ——と思ふと、のび／＼した手足が、きり／＼と緊つて、身體が帽子まで堅く成つた。

何故か四邊が視められる。

怒う、小北と姓を言ふと、學生で、故郷の舊友のやうであるが、然うでない。是は平吉……平さんと云ふが早解り。織次の亡き親父と同じ夥間の職人である。

此處からは最う近い。此の柳の通筋を突當りに、眞蒼な山がある。其れへ向つて二町ばかり、城の大手を右に見て、左へ折れた、屋並の揃つた町の中ほどに、きちんとして暮して居る筈。

其の男を訪ねるに仔細はないが、訪ねて行くのに、十年越の思出がある、……まあ、最う少し秘して置かう。

さあ、其處へ、と成ると、早や背後から追立てられるやうに、そは／＼するのを、成りたけ自分で落着いて、悠々と歩行き出したが、取つて三十と云ふ年紀の、渠の胸の騒ぎやう。さては今

の時の暢氣さは、此の浪が立たうとする用意に、フイと靜まつた海らしい。

二

此の通は、渠が生れた町とは大分間が離れて居るから、軒を並べた兩側の家に、別に知己の顔も見えぬ。それでも何かにつけて思出す事はあつた。通りの中ほどに、一軒料理屋を兼ねた旅店がある。其處へ東京から新任の縣知事がお乗込とあるに就いて、向つた玄關に段々の幕を打ち、水桶に眞新しい柄杓を備へて、恭しく盛砂して、門から新筵を敷詰めてあるのを、向側の軒下に立つて視めた事がある。通り懸りのお百姓は、此の前を過ぎるのに、

「あゝつ」と云つて腰をのめらして行つた。……御威勢のほどは、後年地方長官會議の節に上京なされると、電話第何番と言ふのが見得の旅館へ宿つて、葱の噓で、東京の町へ出らるゝ御身分とは夢にも思はれない。

また夢のやうだけれども、今見れば麵麴屋に成つた、丁ど其の硝子窓のあるあたりへ、幕を絞つて——暑くなるよと夜店の中へ、見世ものの小屋が掛つた。猿芝居、大蛇、熊、盲目の墨塗——（此の土俵は星の下に暗かつたが）——西洋手品など一廓に、葎草の花を咲かせた——表通りへ目に立つて、蜘蛛男の見世物があつた事を思出す。



「二股ぢや。」と車夫が答へた。——織次は、此の國に育つたが、用のない町端まで、小兒の時には行かなかつたので、唯名に聞いた、五月晴の空も、暗い、其の山。

「あの山は？」

腕車を雇つて、さして行く従妹の町より、眞先に、

前の事であつた。

汽車が通じてから、はじめて歸つたので、停車場を出た所の、故郷は、と一目見ると、石を置いた屋根より、赤く塗つた柱より、先づ其の山を見て、暫時茫然としてゐんだのは、つい二三日前の事であつた。

腕車を雇つて、さして行く従妹の町より、眞先に、

腕車を雇つて、さして行く従妹の町より、眞先に、

腕車を雇つて、さして行く従妹の町より、眞先に、

腕車を雇つて、さして行く従妹の町より、眞先に、

腕車を雇つて、さして行く従妹の町より、眞先に、

腕車を雇つて、さして行く従妹の町より、眞先に、

腕車を雇つて、さして行く従妹の町より、眞先に、

腕車を雇つて、さして行く従妹の町より、眞先に、

腕車を雇つて、さして行く従妹の町より、眞先に、

腕車を雇つて、さして行く従妹の町より、眞先に、

腕車を雇つて、さして行く従妹の町より、眞先に、

腕車を雇つて、さして行く従妹の町より、眞先に、

腕車を雇つて、さして行く従妹の町より、眞先に、

腕車を雇つて、さして行く従妹の町より、眞先に、

腕車を雇つて、さして行く従妹の町より、眞先に、

腕車を雇つて、さして行く従妹の町より、眞先に、

腕車を雇つて、さして行く従妹の町より、眞先に、

腕車を雇つて、さして行く従妹の町より、眞先に、

腕車を雇つて、さして行く従妹の町より、眞先に、

腕車を雇つて、さして行く従妹の町より、眞先に、

腕車を雇つて、さして行く従妹の町より、眞先に、

腕車を雇つて、さして行く従妹の町より、眞先に、

腕車を雇つて、さして行く従妹の町より、眞先に、

腕車を雇つて、さして行く従妹の町より、眞先に、

腕車を雇つて、さして行く従妹の町より、眞先に、

腕車を雇つて、さして行く従妹の町より、眞先に、

腕車を雇つて、さして行く従妹の町より、眞先に、

腕車を雇つて、さして行く従妹の町より、眞先に、

腕車を雇つて、さして行く従妹の町より、眞先に、

腕車を雇つて、さして行く従妹の町より、眞先に、

腕車を雇つて、さして行く従妹の町より、眞先に、

腕車を雇つて、さして行く従妹の町より、眞先に、

腕車を雇つて、さして行く従妹の町より、眞先に、

腕車を雇つて、さして行く従妹の町より、眞先に、

腕車を雇つて、さして行く従妹の町より、眞先に、

額の出た、頭の大きい、鼻のしゃくんだ、黄色い顔が、其の長さ、大人の二倍、やがて一尺、飯櫃形の天窓にチヨン鬚を載せた、身の丈と云ふほどのものはない。顔から爪先の生えたのが、金ぴかの上下を着た處は、アイ來た、と手品師が箱の中から拇指で摘み出しさうな中親仁。これが看板で、小屋の正面に、鼠の嫁入に擔ぎさうな小さな駕籠の中に、くたりと成つて、ふんくと鼻息を荒くする毎に、其の出額に蛆のやうな横筋を畝らせながら、きよろくと、込合ふ群集を視めて控へる……口上言が其の出番に、

「太夫いの、太夫いの。」と呼ぶと、駕籠の中で、しやつきりと天窓を掉立て、

「唯今、其れへ。」

とひねこびれた聲を出し、顔をしゃくつて衣紋を造る。其の身動きに、馳の香を芬とさせて、ひよこくと行く足取が蜘蛛の巣を渡るやうで、大天窓の頸窪に、附木ほどの腰板が、ちよこなんと見えたのを憶起す。

其れが舞臺へ懸る途端に、ふはくと幕を落す。其の時木戸に立つた多勢の方を見向いて、

「うふん。」と云つて、目を剝いて、脳天から振下つたやうな、紅い舌をべろりと出したのを見て、

織次は悚然として、雲の蒸す月の下を家へ遁歸つた事がある。

人間ではあるまい。鳥か、獸か、其れとも矢張土蜘蛛の類かと、訪ねると、……其の頃六十ば

かりだつた織次の祖母さんが、

「彼は、二股坂の庄屋殿ぢや。」といつた。

此の二股坂と言ふのは、山奥で、可怪い傳説が少くない。其れを越すと隣國への近路ながら、

人界と境を隔つ、自然のお關所のやうに土地の人は思ふのである。

此の邊からは、峰の松に遮られるから、其の姿は見えぬ。最つと乾の位置で、町端の方へ退ると、

近山の背後に海がありさうな雲を隔てて、山の形が歴然と見える。……

汽車が通じてから、はじめて歸つたので、停車場を出た所の、故郷は、と一目見ると、石を置いた屋根より、赤く塗つた柱より、先づ其の山を見て、暫時茫然としてゐんだのは、つい二三日前の事であつた。

腕車を雇つて、さして行く従妹の町より、眞先に、

腕車を雇つて、さして行く従妹の町より、眞先に、

腕車を雇つて、さして行く従妹の町より、眞先に、

腕車を雇つて、さして行く従妹の町より、眞先に、

腕車を雇つて、さして行く従妹の町より、眞先に、

腕車を雇つて、さして行く従妹の町より、眞先に、

腕車を雇つて、さして行く従妹の町より、眞先に、

腕車を雇つて、さして行く従妹の町より、眞先に、

腕車を雇つて、さして行く従妹の町より、眞先に、

腕車を雇つて、さして行く従妹の町より、眞先に、

腕車を雇つて、さして行く従妹の町より、眞先に、

腕車を雇つて、さして行く従妹の町より、眞先に、

腕車を雇つて、さして行く従妹の町より、眞先に、

腕車を雇つて、さして行く従妹の町より、眞先に、

腕車を雇つて、さして行く従妹の町より、眞先に、

腕車を雇つて、さして行く従妹の町より、眞先に、

腕車を雇つて、さして行く従妹の町より、眞先に、

腕車を雇つて、さして行く従妹の町より、眞先に、

腕車を雇つて、さして行く従妹の町より、眞先に、

腕車を雇つて、さして行く従妹の町より、眞先に、

腕車を雇つて、さして行く従妹の町より、眞先に、

腕車を雇つて、さして行く従妹の町より、眞先に、

腕車を雇つて、さして行く従妹の町より、眞先に、

腕車を雇つて、さして行く従妹の町より、眞先に、

腕車を雇つて、さして行く従妹の町より、眞先に、

腕車を雇つて、さして行く従妹の町より、眞先に、



爾時は何んの心もなく、件の二股を仰いだか、此處に来て、昔の小屋の前を通ると、あの、蜘蛛大名が庄屋をすると、可怪しく胸に響くのであつた。

まだ、其の蜘蛛大名の一座に、胴の太い、脚の短い、芋蟲が髪を結つて、緋の腰布を捲いたやうな侏儒の婦が、三人ばかり居た。其れが、見世ものの踊を済まして、寝しなに町の湯へ入る時は、風呂の縁へ兩手を掛けて、横に兩脚でドボンと浸る。而して湯の中でぶくぶくと泳ぐと聞いた。

然う言へば湯屋はまだある。けれども、以前見覺えた、兩眼眞黄色な繪具の光る、巨大な蜈蚣が、赤黒い雲の如く渦を卷いた眞中に、俵藤太が、弓矢を挟んで身構へた暖簾が、たゞ、男、女と上へ割つて、柳湯、と白抜きのに懸替つて、門の目印の柳と共に、枝垂れたやうに成つて、折から森閑と風もない。

人通りも殆ど途絶えた。

が、何處ともなく、柳に暗い、湯屋の硝子戸の奥深く、ドボンくと、不圖湯の煽つたやうな響が聞える。……

立淀んだ織次の耳には、其れが二股から遠く傳はる、ものの筈のやうに聞えた。織次の祖母は、見世物の其の侏儒の婦を教へて、

「あの娘たちは、蜘蛛庄屋にかどはかされて、其の奴に成つたいの。」

と昔語りに話して聞かせた所爲であらう。あ、薄曇りの空低く、見通しの町は浮上つたやうに見る目に浅いが、故郷の山は深い。

又山と言へば思出す、此の町の賑かな店々の赫と明るい果を、縦筋に暗く割つた一條の路を隔てて、數百の燈火の織目から抜出したやうな薄茫乎として灰色の隈が暗夜に漾ふ、まばらな人立を前に控へて、大手前の土堀の隅に、足代板の高座に乗つた、さいもん語りのデロレン坊主、但し長い頭髪を額に振分け、ごろ／＼と錫を鳴らしつゝ、鹽辛聲して、

「……姫松どののはエ」と、大宅太郎光國の戀女房が、瀧夜又姫の山寨に捕へられて、小賊どもの手に松葉燻となる處——樹の枝へ釣上げられ、後手の腕を空に、反返る髪を倒に落して、ヒイ／＼と咽んで泣く。やがて夫の光國が來合はせて助けると云ふのが、明晩、とあつたが、翌晩も其のまゝで、次第に姫松の聲が濁れる。

「我が夫いなう、光國どの、助けて給へ。」とばかりで、此の武者修業の、足の遅さ。三晩目に、漸とこさと山の麓へ着いたばかり。

織次は、小兒心にも朝から氣に成つて、蚊帳の中でも鬚髯と蚊燻しの煙が來るから、續けて其の翌晩も聞きに行つて、汚い弟子が古浴衣の膝切な奴を、胸の處でだらしとした拳固の矢藏、片



手をぬい、と出し、人の顫をしゃくふやうな手つきで、錢を強請る、爪の黒い掌へ持つて居ただけの小遣を載せると、目を睜つたが、黄色い齒でニヤリとして、身體を撫でようとしたので、衝と極が悪く退つた頸へ、大粒な雨がポツリと來た。  
忽ち大驟雨と成つたので、蒼く成つて駈出して歸つたが、家までは七八町、其の、びしよ濡れさ加減思ふべしで。

あと二夜ばかりは、空模様を見て親たちが出さなかつた。

さて晴れば晴れるものかな。磨出した良い月夜に、駒の手綱を切放されたやうに飛出して行つた時は、もうデロレンの高座は、消えたか、と跡もなく、後幕一重引いた、あたりの土堀の破目へ、白々と月が射した。

茫と成つて、辻に立つて、前夜の雨を怨めしく、空を仰ぐ、と皎々として澄渡つて、銀河一帯、近い山の端から玉の橋を町家の屋根へ投げ懸ける。其の上へ、眞白な形で、瑠璃色の透くのに薄い黄金の輪郭した、さげ結びの帯の見える、うしろ向きで、雲のやうな女の姿が、すつと立つて、するくと月の前を歩行いて消えた。……織次は、且つ思ひ且つ歩行いて、丁ど其の辻へ來た。

四

湯屋は郵便局の方へ背後に成つた。

辻の、此の邊で、月の中空に雲を渡る婦の幻を見たと思ふ、屋根の上から、城の大手の森をかけて、一面にどんよりと曇つた中に、一筋眞白な雲の靡くのは、やがて銀河に成る時節も近い。……視むれば、幼い時の其の光景を目前に見るやうでもあるし、又夢らしくもあれば、前世が兎であつた時、木賊の中から、ひよいと覗いた景色かも分らぬ。待て、希くは兎でありたい。二股坂の狸は恐れる。

いや、恚うも、他愛のない事を考へるのも、思出すのも、小北の許へ行くに就けて、人は知らず、自分で氣が咎める己が心を、我とさあらぬ方へ紛らさうとしたのであつた。

さて、此の辻から、以前織次の家のあつた、某……町の方へ、大手筋を眞直に折れて、一丁ばかり行つた處に、小北の家がある。

兩側に軒の並んだ町ながら、此の小北の向側だけ、一軒づもりポカリと抜けた、一町内の用心水の水溜で、石畳みは強勢でも、緑晶色の大溝に成つて居る。

向うの溝から鱸により、此方の溝から鱸により、と饒舌るのは、蓋し此の水溜からはじまつた事であらう、と夏の夜店へ行歸りに、織次は獨りで然う考へたもので。  
同一早饒舌りの中に、茶釜雨合羽と言ふのがある。ト恰も此の溝の左角が、合羽屋、は面白い。



……まだ此の時も、澁紙の暖簾が懸つた。

折から人通りが二三人——中の一人が、彼の前を行過ぎて、フト見返つて、又ひよいくと尻輕に歩行出した時、織次は帽子の庇を下げたが、瞳を屹と、溝の前から、件の小北の店を透かした。

此處に又立留つて、少時猶豫つて居たのである。

木格子の中に硝子戸を入れた店の、仕事の道具は見透いたが、弟子の前垂も見えず、主人の平吉が半纏も見えぬ。

羽織の袖口兩方が、胸にぐいと上るやうに兩腕を組むと、身體に勢を入れて、つか／＼と足を運んだ。

軒から直ぐに土間へ入つて、横向きに店の戸を開けながら、

「御免なさいよ。」

「はい／＼。」

と軽い返事で、身輕にちよ／＼と茶の間から出た婦人は、下膨れの色白で、眞中から鬢を分けた濃い毛の束ね髪、些と煤びたが、人形たちの古風な顔。満更の容色ではないが、紺の筒袖の上被衣を、淺葱の紐で胸高に一寸留めた甲斐々々しい女房ぶり。些と氣になるのは、此家あたりの

暮向きでは、之がつい通りの風俗で、誰も怪しみはしないけれども、疊の上を尻端折、前垂で膝を隠したばかりで、湯具を其のまゝの足を、茶の間と店の敷居で留めて、立ち身のなりで口早なもの言ひやう。

「何處からおいで遊ばしたえ、何んの御用で。」

と一向氣のない、空で覺えたやうな口上。言つきは慇懃ながら、取附き端のない會釋をする。

「私だ、立田だよ、しばらく。」

最う忘れたか、覺えがあらう、と顔を向ける、と黒目勝でも勢のない、塗つたやうな瞳を流して、凝と見たが、

「あれ。」と言ひさま、ぐつたりと膝を支いた。胸を衝と反らしながら、驚いた風をして、

「何うして貴下。」

とひよいと立つと、端折つた太脛の包ましい見得もなう、ト身を返して、背後を見せて、つかつかと摺足して、奥の方へ駈込みながら、

「もしえ！もしえ！一寸……立田様の織さんが。」

「何、立田さんの。」

「織さんですがね。」



「や、それは。」

と云ふ平吉の聲が臺所で。がたく、土間を踏む下駄の音。

五

「さあ、お上り遊ばして、まあ、何うして貴下。」

と又店口へ取つて返して、女房は立迎へる。

「ぢや、御免なさい。」

「何うぞ此方へ。」と、大きな聲を出して、満面の笑顔を見せた平吉は、茶の室を越した見通しの奥へ、臺所から駈込んで、幅の廣い前垂で、濡れた手をぐいと拭きつゝ、

「すつと、すつと、此方へ。」と最う眞中へ座蒲團を持出して、床の間の方へ直しながら、一ツくるりと立身で廻る。

「構つちや可厭だよ。」と衝と茶の間を抜ける時、襖二間の上を渡つて、二階の階子段が緩く架る、拭込んだ大戸棚の前で、入ちがひに成つて、女房は店の方へ、ばたくと後退りに退つた。

其の茶の室の長火鉢を挟んで、差むかひに年寄りが二人居た。あゝ、まだ達者だと見える。火鉢の向うに踞つて、其の法然天窓が、火の氣の少い灰の上に冷たさうで、鐵瓶より低い處にしな

びたのは、最う七十の上に成らう。此の女房の母親で、年紀の相違が五十の上、餘り間があり過ぎるやうだけれども、此は女房が大勢の娘の中に一番末子である所爲で、それ、黒のけんちうの羽織を着て、小さな鬚に籠甲の耳こじりをちよこんと極めて、手首に輪數珠を掛けた五十恰好の婆が背後向に坐つたのが、其の總領の娘である。

不沙汰見舞に來て居たらう。此の婆は、餘所へ嫁附いて今は産んだ悴にかゝつて居る筈。悴と云ふのも、煙管、簪、同じ事を業とする。

が、此の婆娘は蟲が好かぬ。何爲か、其の上、幼い記憶に怨恨があるやうな心持が、一目見ると直ぐにむらゝと起つたから——此の時黄色い、でつぶりした眉のない顔を上げて、じろりと額で見上げたのを、織次は屹と唯一目。で、知らぬ顔して奥へ通つた。

「南無阿彌陀佛。」

と折から唸るやうに老人が唱へると、婆娘は押冠せて、

「南無阿彌陀佛。」と生若い聲を出す。

「さて、何うも、お珍らしいとも、何んとも早や。」と、平吉は坐りも遣らず、中腰でそはく。

「お忙しいかね。」と織次は構はず、更紗の座蒲團を引寄せた。

「はゝゝ、勝手に道樂で忙しいんでしてな、つい暇でもございまするしね、怠け仕事に板前で庖



丁の腕前を見せて居た所でしてねえ。え、織さん、此の二三日は濱で鯛がとれますよ。」と縁へはみ出るくらの端近に坐ると一緒に、其處にあつた塵を拾つて、ト首を捻つて、土間に棄てた、其の手をぐいと掴んで、指を揉み、

「何時、當地へ。」

「二三日前さ。」

「雑と十四五年に成りますな。」

「早いものだね。」

「早いにも、織さん、私なんざ最う御覽の通り爺に成りましたよ。是ぢや途中で擦違つたぐらゐでは、一寸お分りに成りますまい。」

「否、些とも變らないね、相かはらず意氣な人さ。」

「これはしたり！」

と天井抜けに、突出す腕で額を叩いて、

「はつ、恐入つたね。東京仕込のお世辭は強い。人、可加減に願ひますぜ。」

と前垂を横に刎ねて、肱を突張り、ぴたりと膝に手を支いて向直る。

「何、申戲なものか。」と言ふ時、織次は巻蓑を火鉢にさして俯向いて莞爾した。面色は凜とした

から優しかつた。

「粗末なお茶でございます、直ぐに、あの、入かへますけれど、お一ツ。」

と女房が、茶の室から、半身を摺らして出た。

「これえ、私が事を意氣な男だと言ひなさるぜ、御馳走をしなけりや不可んね。」

「あれ、もし、お膝に。」と、うっかり平吉の言ふ事も聞落したらしかつたのが、織次が膝に落ち

た吸鼓の灰を弾いて、はつとしたやうに臉を染めた。

六

「さて、何うも更りましては、何んとも申譯のない御不沙汰で。否、最う、そりや實に、烏の鳴かぬ日はあつても、お噂をしない日はありませんが、なあ、これえ。」

「え、。」と言つた女房の顔色の寂しいので、烏ばかり鳴くのが分る。が、別に織次は噂をされよ

うとも思はなかつた。

平吉は疊み掛け、

「牛は牛づれとか言ふんでえせう。手前が何しますにつけて、此も又、學校に縁遠い方だつたものでえすから、暑さ寒さの御見舞だけと申すのが、書けないものには、飛んだ何うも、實印を捺



しますより、事も大層に成ります處から、何とも申譯がございやせん。  
何しろ、まあ、御緩りなすつて、いづれ今晚は手前どもへ御一泊下さいませうで。」  
と膝をすつと手先で撫でて、取澄ました風をしたのは、其れに極つた、と云ふ體を、仕方で見  
せたものである。

「申戯ぢやない。」と餘り其の見透いた世辭の苦々しさに、織次は我知らず打棄るやうに言つた。  
些と其の言が激しかつたか、

「え。」と、聞直すやうにしたが、忽ち唇の薄笑。

「は、あ、御同伴の奥さんがお待兼ねで。」

「申戯ぢやない。」

と今度は穩かに微笑んで、

「そんなものが有るものかね。」

「そんなものとは？」

「貴下、まだ奥様はお持ちなさりませんの。」

と女房、胸を前へ、手を疊にす。

織次は卷蓑を、ぐいと、さし捨てて、

「持つもんですか。」

「織さん。」

と平吉は薄く刈揃へた頭を掉つて、目を据ゑた。

「まだ、貴下、そんな事を言つて居ますね。持つものか！ なんて貴下、一生持たないで何うな  
さる。……また、こりやお亡くなすつた父様に代つて、一説法せにやならん。例の晩酌の時  
と言ふとはじまつて、貴下が殊の外弱らせられたね。あれを一つ遣りやせう。」

と片手で小膝をボンと敲き、

「飲みながらが可い、召飲りながら聴聞をなさい。これえ、何を、お銚子を早く。」

「唯、最う爛けてござりえす。」と女房が腰を浮かす、其の裾端折で。

織次は、酔つた勢で、とも思ふ事があつたので、黙つて居た。

「ぬたをの……今、私が搦鉢に拵へて置いた、あれを、鉢に入れて、小皿を二つ、可いか、手綺  
麗に装はないと食へぬ奴さね。……最う不斷、本場で旨いものを食りつけてるから、田舎料理な  
んぞお口には合はん、何にも入らない、あ、入らないとも。」

と獨りで極めて、もじつく女房を臺所へ追立てながら、

「織さん、鯛のぬただ、こりや御存じの通り、他國にはない味です。これえ、早くしなよ。」



あ、しばらく。座に其の鯛の臭氣のない内、言はねば成らぬ事がある……  
「あの、平さん。」

と織次は若々しいもの言ひした。

「此家に何だね、僕ン許のを買つて貰つた、錦繪があつたつけね。」

「へい、錦繪。」と、さも年久しい昔を見るやうに、瞳を凝と上へあげる。

「内で困つて、……今でも貧乏は同一だが。」

と織次は屹と腕を拱んだ。

「私が學校で要る教科書が買へなかつたので、親仁が思切つて、阿母の記念の錦繪を、古本屋に賣つたのを、平さんが買戻して、藏つといてくれた。其の繪の事だよ。」

時雨の雲の暗い晩、寂しい水菜で夕餉が済む、と箸も下に置かぬ前から、織次は何しても持たねばならない、と言つて強請つた、新撰物理書と云ふ四冊ものの黒表紙。これがなければ學校へ通はれぬと言ふのではない。科目は教師が黒板に書いて教授するのを、筆記帳へ書取つて、事は足りたのであるが、皆が持つてるから欲しくて成らぬ。定價が其の時金八十錢と、覺えて居る。

七

親父は其の晩、一合の酒も飲まないで、燈火の赤黒い、火屋の龜裂に紙を貼つた、笠の煤けた洋燈の下に、膳を引いた跡を、直ぐ長火鉢の向うの細工場に立ちもせず、袖に繼のあつた、黒のころの半襟の破れた、千草色の半纏の片手を懐に、膝を立てて、其れへ頬杖ついて、面長な思案顔を重さうに支へて黙然。

一寸取着端がないから、

「だつて、欲いんだもの。」と言ひ棄てに、ちよこくと板の間を傳つて、だッツ廣い、寒い臺所へ行く、と向うの隅に、霜が見える……祖母さんが頭巾もなしの眞白な小さなおばこで、皿小鉢を、がち／＼と冷い音で洗つてござる。

「買つとくれよ、よう。」

と聞分けもなく織次が其の袂にぶら下つた。流は高い。走りもとの破れた芥箱の上下を、ちよろちよろと鼠が走つて、豆洋燈が蜘蛛の巢の中に茫とある……

「よう、買つとくれよ、お辨當は梅干で可いからさ。」

祖母は、顔を見て、しばらく黙つて、

「お、何うにかして進ぜよう。」

と洗ひさせた茶碗を其のま、前垂で手を拭き／＼、氷のやうな板の間を、店の疊へ引返して、



火鉢の前へ、力なげに膝をついて、背後向きに、まだ俯向いたなりの親父を見向いて、  
「の、然うさつしやいよ。」

「成程。」

「他の事ではない、あの子も喜ばう。」

「それでは、母親、御苦勞でございます。」

「何んの、お前。」

と納戸へ入つて、戸棚から持出した風呂敷包が、其の錦繪で、國貞の畫が二百餘枚、蟲干の時、  
雛祭、秋の長夜のをりくことに、馴染の姉様三千で、下谷の伊達者、深川の婀娜者が澤山居る。  
祖母さんは下に置いて、

「一度見さつしやるか。」と親父に言つた。

「いや、見ますまい。」

と顔を背向ける。

祖母は解き掛けた結目を、其のまゝ結へて、一寸襟を引合はせた。細い半襟の半纏の袖の下に  
抱へて、店のはづれを板の間から、土間へ下りようとして、暗い處で、

「可哀やの、姉様たち。私が許を離れてもの、蜘蛛男に買はれさつしやるな、二股坂へ行くまい

ぞ。」

と小さな聲して言聞かせた。織次は小兒心にも、其の繪を賣つて金子に代へるのである、と思  
つた。……顔馴染の濃い紅、薄紫、雪の膚の姉様たちが、此の暗夜を、すつと門を出る、……  
と偶と寂しく成つた。が、紅、白粉が何んの其の、で、新撰物理書の黒表紙が、四冊並んで、目  
の前で、ひよい、と躍つた。

「待つてござい、織や。」

ごろ／＼と静かな樞戸の音。

臺所を、どんがた／＼、鼠が荒野と駆廻る。

と祖母が軒先から引返して、番傘を持つて出直す時、

「あのう、臺所の燈を消しといくらつしやいよ、の。」  
で、ガタリと門の戸がしまつた。

コト／＼と下駄の音して、何處まで行くぞ、時雨の脚が颯と通る。あはれ、祖母に導かれて、  
振袖が、詰袖が、褌を取つたの、裳を引いたの、籠甲の櫛の照々する、銀の簪の揺々するのが、  
眞白な脛も露はに、友染の花の幻めいて、雨具もなしに、びしやくと、跣足で田舎の、山近な  
町の暗夜を辿る風情が、雨戸の破目を朦朧として透いて見えた。



其れも科學の權威である。物理書と云ふのを力に、幼い眼を眩まして、其の美しい姉様たちを、ぼつたて、ぼつたて、叩き出した、黒表紙の其の状を、後に思へば鬼であらう。

臺所の灯は、遙に奥山家の孤家の如くに點れて居る。

ト其の壁の上を窓から覗いて、風にも雨にも、ばさ／＼と髪を揺つて、團扇の骨ばかりな顔を出す……隣の空地の棕櫚の樹が、其の夜は妙に寂として氣勢も聞えぬ。

鼠も寂寞と音を潜めた。……

八

臺所と、此の上框とを隔ての板戸に、地方の習慣で、蘆の簾の掛つたのが、破れる、断れる、其の上、手の届かぬ何年かの煤がたまつて、相馬内裏の古御所めく。

其の蔭に、遠い灯のちらりとするのを背後にして、お納戸色の薄い衣で、ひたと板戸に身を寄せて、今出て行つた祖母の背後影を、凝と見送る状に亘んだ婦がある。

一目見て、幼い織次は此の現世にない姿を見ながら、驚きもせず、しかし、とぼんとして小さく立つた。

其の小兒に振向けた、眞白な氣高い顔が、雪のやうに、颯と消える、とキリキリキリ——と臺

所を六角に井桁で仕切つた、内井戸の轆轤が鳴つた。が、すぐに、かたりと小皿が響いた。

流の處に、淺葱の手絡が、時ならず、雲から射す、濃い月影のやうにちら／＼して、黒髪のおくれ毛がはら／＼とかゝる、鼻筋のすつと通つた横顔が仄見えて、白い拭布がひらりと動いた。

「織坊。」

と父が呼んだ。

「あい。」

ばた／＼と駈出して、其時まで同じ處に、晝に描いたやうに静として動かなかつた草色の半纏に拵附く。

「あゝ、阿母のやうな返事をする、肖然だ、今の聲が。」

と膝へ抱く。胸に附着き、

「臺所に母様が。」

「えゝ！」と父親が膝を立てた。

「祖母さんの手傳ひして。」

「親父は、其のまゝ、緊乎と抱いて、

「織坊、本を買つて、何を習ふ。」



「あ、物理書を皆讀むとね、母様の居る處が分るつて、先生が然う言つたよ。だから、早く欲しかつたの、臺所に居るんだもの、最う買はなくとも可い。……おいでよ、父上。」

と手を引張ると、猶豫ひながら、とぼくと疊に空足を踏んで、板の間へ出た。

其の蹙音より、鼠の駈ける音が激しく、棕櫚の骨がばさりと覗いて、其處に、手絡の影もない。

織次はわつと泣出した。

父は立ちながら背を擦つて、わななく震へた。

雨の音が颯と高い。

「お、冷え、本降、本降。」

と高調子で門を入つたのが、此處に差向つた此の、平吉の平さんであつた。

傘をがさりと掛けて、提灯をふつと消す、と蠟燭の匂が立つて、家中佛壇の薰がした。

「呀！ 世話場だね、何うなすつた、父さん。お祖母は、何處へ。」

で、父が一伍一什を話すと――

「立替へませう、可惜ものを。七貫や八貫で手離すには當りやせん。本屋ぢや幾千に買ふか知れないけれど、差當り、其の物理書と云ふのを求めなざる、ね、其れだけ此處にあれば可い譯だ、

と先づ言つた譯だ。先方の買直がぎりぐりの處なら買戻すとす。……高く買つて居たら破談に

するだ、ね。何しろ、こ、は一ツ、私に立替へさしてお置きなさい。……そらく、はじめたは

じめた、お株が出たぜえ。こんな事に濟まぬも義理もあつたものかね、え、君。」

と太く書生ぶつて、

「だから、氣が濟まないなら、預け給へ。僕に、ね、僕は構はん。構はないけれど、唯立替へさ

して氣が濟まない、と言ふんなら、其の金子の出来るまで、僕が預かつて置けば可うがせう。さ、

其れで極つた。……一ツ莞爾としてくれ給へ。君、しかし何んだね、これにつけても、小兒に學

問なんぞさせねえが可いぢやないかね。くだらない、最うこれ織公も十一、吹鞆ばたくは勤ま

るだ。二錢三錢の足には成る。ソレ直ぐに鹿尾菜の代が浮いて出ようと云ふものさ。……實の處、

僕が小指の姉なんぞも、此家へ一人二度目を世話しようと云つてますがね、お互に此の職人が

小兒に本を買つて遣る苦勞をするやうぢや、末を見込んで嫁入がないツさ。ね、祖母が、係と君

の世話をして、此の寒空に水仕事だ。

因果な婆さんやないかい、と姉がいつでも言つてます。……と爾時言つた。

——其の姉と言ふのが、次室の長火鉢の處に來て居る。——



其處へ、祖母が歸つて來たが、何んにも言はず、平吉に挨拶もせぬ先に、  
「さあ」と言つて、本を出す。

織次は飛んで獅子の座へ直つた勢。上から新撰に飛付く、と突のめつたやうに成つて見た。黒  
表紙には綾があつて、艶があつて、眞黒な胡蝶の天鵝絨の羽のやうに美しく……一枚開くと、き  
らきらと字が光つて、細流のやうに動いて、何がなしに、言ひやうのない強い薫が芬として、目  
と口に浸込んで、中に描いた器械の圖などは、ぶツしり鐵の楯のやうに洋燈の前に顯れ出でて、  
繪の硝子が燦と光つた。

さて、祖母の話では、古本屋は、あの錦繪を五十錢から直を付け出して、しまひに七十五錢よ  
りは出せぬと言ふ。きなかも其の上はつかぬと斷る。欲しい物理書は八十錢。何でも直ぐに買つて  
歸つて、孫が喜ぶ顔を見たさに、思案に餘つて、店端に腰を掛けて、時雨に白髪を濡らして居る  
と、其處の亭主が、それでは婆さん恚うしなよ。此處にそれ、はじめの一冊だけ、一寸表紙に竹  
篋で折返しの跡をつけた、古本の出物がある。定價から五錢引いて、丁どに鏝を合はせて置く。  
で、孫に持つて行つて遣るが可い、と捌きを付けた。國貞の畫が雉と二百枚、辛うじて此の四冊  
の、然も古本と代つたのである。

平吉はいきり出した。何んにも言ふなで、一圓出した。

「織坊、母様の記念だ。お祖母さんと一緒に行つて、今度はお前が、背負つて來い。」

「あゝ。」

と其の四冊を持つて立つと、

「路が悪い、途中で落して汚すと成らぬ、一冊だけ持つて來さつしやい、又抱いて寝るのぢや  
の。」

と祖母も莞爾して、嫁の記念を取返す、二度目の外出はいそぐするのに、手を曳かれて、キ  
チンと小口を揃へて置いた、あと三冊の兄弟を、父の膝許に残しながら、出しなに、臺所を竊と  
覗くと、灯は棕櫚の葉風に自から消えたと覺しく……眞の暗がりに、最う何んにも見えなかつた。  
雨は小止で。

織次は夜道をたゞ、夢中で本の香を嗅いで歩行いた。

古本屋は、今日此の平吉の家に來る時通つた、確か、あの湯屋から四五軒手前にあつたと思ふ。  
四辻へ行く時分に、祖母が破傘をすぼめると、蒼く光つて、蓋を拂つたやうに月が出る。山の形  
は骨ばかり白く澄んで、兎のやうな雲が走る。

織次は偶と幻に見た、夜店の頃の銀河の上の婦を思つて、先刻とぼくと地獄へ追遣られた大  
勢の姉様は、まさに救はれて其の通り天にのぼる、と心が勇む。



一足先へ駈出して、見覺えた、古本屋の戸へ附着いたが、店も大戸も閉つて居た。寒さは寒し、雨は降つたり、町は寂として何處にも灯の影は見えぬ。

「最う寝たかの。」

と祖母がせか／＼ござつて、

「御許さい、御許さい。」

と遠慮らしく店頭を叩く。

天窓の上でガツタリ音して、

「何んぢや。」

と言ふ太い聲。箱のやうな仕切戸から、眉の迫つた、頬の膨れた、への字の口して、小鼻の筋から顔へかけて、べたりと薄髻の生えた、四角な顔を出したのは古本屋の亭主で、……此の顔と、其の時の口惜さを、織次は如何にしても忘れられぬ。

繪は最う人に賣つた、と言つた。

見知越の仁ならば、知らせて欲しい、其處へ行つて頼みたい、と祖母が言ふと、一寸々々見懸ける男だが、此土地のものではねえの。越後へ行く飛脚だによつて、脚が疾い。今頃は最う二股を半分越したらう、と小窓に頬杖を置いて嘲笑つた。

縁の早い、賣口の美しい別嬪の畫であつた。主が歸つて間も無い、店の燈許へ、あの縮緬着物を散らかして、扱帯も、襟も引さらけて見て居る處へ、三度笠を横つちよで、てしま莫蔭、脚絆穿、草鞋でさつ／＼と遣つて來た、足の高い大男が通りすがりに、じろりと見て、いきなり價をつけて、づばりと買つて、濡らしちやならぬと腰づけに、きり／＼と、上帯を結び添へて、雨の中をすたすたと行方知れずよ。……

「分つたか、お婆々。」と言つた。

十

断念めかねて、祖母が何かニツ三ツ口を利くと、擧句の果が、  
「老耄婆め、歸れ。」

と言つて、ゴトンと閉めた。

祖母が、ト目を擦つた歸途。本を持った織次の手は、氷のやうに冷めたかつた。其處で、小さな懷中へ小口を半分差込んで、壓へるやうに顔を付けて、悄然とすると、辻の浪花節が語つた

「姫松殿がエ。」



が暗から聞える。——織次は、飛脚に買去られたと言ふ大勢の姉様が、ぶら／＼と甘干の柿のやうに、樹の枝に吊下げられて、上げつ下ろしつ、二股坂で苛まれるのを、目のあたりに見るやうに思つた。

と矢張芬とする懐中の物理書が、其の途端に、松葉の燻る臭氣がし出した。

固より口實、狐が化けた飛脚でなうて、今時町を通るものか。足許を見て買倒した、十倍百倍の儲が惜さに、貉が勝手なことを吐く。引受けたり平吉が。

で、此の平さんが、古本屋の店へ居直つて、そして買戻してくれた錦繪である。

が、其の後、折を見て、父が在世の頃も、其の話が出たし、織次も後に東京から音信をして、引取らう、引取らうと懸合ふけれども、ちるの、びるので纏まらず、追つかけて追詰めれば、片音信に成つて埒が明かぬ。

今日こそ何んでも、と云ふ意氣込みであつた。

却説、其の事を話し出すと、それ、案の定、天井睨みの上睡りで、ト先づ空惚けて、漸と氣が付いた顔色で、

「はあ、あの江戸繪かね、十六七年、やがて二昔、久しいもんでさ、あつたつけかな。

と聞きも敢へず……

「無い筈はないぢやないか、あんなに頼んで置いたんだから。……」と何故か此の繪が、いはれある、活ける戀人の如く、容易くは我が手に入らない因縁のやうに、寢覺めにも懸念して、此家へ入るのに肩を聳やかしたほど、平吉が怒る態度に、織次は早や躁立ち焦る。

平吉は他處事のやうに仰向いて、

「なあ、これえ。」

と戸棚の前で、膳ごしらへする女房を頤で呼んで、

「知るまいな。忘れたらうよ、な、な、お前も、あの、江戸繪さ、藏の中にあつたけか。

「唯、ござりえず、出しますかえ。」と女房は判然言つた。

「難有う、お琴さん。」

と、はじめて親しげに名を言つて、凝と振向くと、浪の淺葱の暖簾越に、又颯と顔を赧らめた處は、何うやら、あの錦繪の中の、其の、何の一人かに倂が幽に似通ふ。……

「お一つ。」

と其處へ膳を直して銚子を取つた。變れば變るもので、まだ、七八ツ九ツばかり、母が存生の頃の雛祭には、緋の毛氈を掛けた桃櫻の壇の前に、小さな蒔繪の膳に並んで、此の猪口ほどな塗椀で、一緒に蜆の汁を替へた時は、此の娘が、練物のやうな顔のほかは、着くるんだ花の友染で、



其の時分から圓い背を、些と背屈みに坐る癖で、今も其の通りなのが、恚うまで變つた。  
平吉は既う五十の上、女房はまだ二十の上を、二ツか、多くて三ツであらう。此の姉だつた平吉の前の家内が死んだあとを、十四五の、まだ鳥も宿らぬ花が、夜半の嵐に散らされた。はじめ孫とも見えたのが、やがて娘らしく、妹らしく、恚うした處では肖しく成つて、女房ぶりも哀に見える。

此も飛脚に攫はれて、平吉の手に捕はれた、一枚の繪であらう。

いや、何んにつけても、早く、と又屹と居直ると、女房の返事に、苦い顔して、横睨みをした平吉が、

「だが、何だぜ、これえ、何それ、何、あの貸した切に成つてる筈だぜ。催促はするがね……それ、な、これえ。まだ、あのま、返つて来ないよ、然うだよ。あ、然うだよ。」

と幾度も一人で合點み、

「え、織さん、いや、何うも、あの江戸繪ですがな、近所合壁、親類中の評判で、平吉が許へ行つたら、大黒柱より江戸繪を見い、と云ふ騒ぎで、来るほどに、集るほどに、丁と片時も落着いて居た験はがせん。」

と藏の中に、何とやらと言つた、其の口の下……

「手前ぢや、まあ、持物と言つたやうなもの、言はばね、織さん、何んですわえ。それ、貴下から預つて居るも同然な品なんだから、出入れには、自然、指垢、手擦、つい汚れ勝にもなりやせうで、見せぬと言へば喧嘩に成る……弱るの何んの。其處で先づ、貸したやうに、預けたやうに、餘所の藏に秘つてありますわ。處が、それ。」

と、これも氣色ばんだ女房の顔を、兀上つた額越に、ト睨つて、

「其の藏持の家には、手前が何でさ、……些と其の錢式の不義理があつて、當分顔の出せない、と云つたやうな譯で、いつれ、取つて来ます。取つて来るには取つて来ますが、つい一寸、ソレ錢式の事ですからな。」

それに、織さん、近頃ぢや價が出ましたつさ。錦繪は……唯一枚が、雑とあの當時の二百枚だつてね、大事のものです。貴下にも大事のもので、又此方も大事のものです。價は惜まぬ、ね、直は惜まぬから手放さないか、と何度も言はれますがね、賣るものですか。そりや賣らない。憚りながら平吉賣らないね。預りものだ、手放して可いものですかい。

けれども、おいそれとは今言つたやうな工合ですから、いつれ、其の何んでさ。ま、ま、めし飲れ、熱い處を。ね、御緩り。さあ、これえ、お焼物が無い。え、間拔けな、ぬたばかり。これえ、御酒に尾頭は附物だわ。ぬたばかり、いやぬたくとぬたつた婦だ。へ、へ、へ、鯛を焼



きな、氣は心よ、な、鯛をよ。」

と何か言ひたさうに、膝で、もちくして、平吉の額をぬすみ見る女房の様は、湯船へ横飛びにざぶんと入る、あの見世物の婦らしい。これも平吉に買はれた爲に、姿まで變つたのであらう。坐り直つて、

「あなたえ。」

と怨めしさうな、情ない顔をする。

ぎよろりと目を剥き、険な面で、

「これえ。」と言つた。

が、鯛の催促をしたやうで。

「今、焼いとるんや。」

と隣室の茶の室で、女房の、其の、上の姉が皺びた聲。

「なんまいだ。」

と婆が唱へる。……これが——「姫松殿がえ。」と耳を貫く。……稱名の中から、じりりと脂肪の煮える響がして、腥いのが、むらくと來た。

此の臭氣が、偶と、あの黒表紙に肖然だと思つた。

と其れならぬ、姉様が、山賊の手に松葉燻しの、亂る、揺めく、黒髪までが目前にちらつく。織次は激く云つた。

「平吉、金子でつく話はつけよう。鯛は待て。」



東京府規格外可許資紙規第一七三號

昭和十七年四月二十五日 印刷  
昭和十七年四月三十日 發行

鏡花全集 第十二卷  
會費 貳圓六拾錢

著者

泉 鏡太郎

發行者

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地  
岩 波 茂 雄

印刷者

東京市下谷區二長町一番地  
井 上 源 丞

印刷所

東京市下谷區二長町一番地  
凸版印刷株式會社

東京市神田區一ツ橋二丁目三番地

發行所 岩波書店

電話九段(33)一八七番(4)  
振替口座東京七四四一六番  
會員番號一〇二〇三七番

配給元

東京市神田區淡路町二丁目九番地

日本出版配給株式會社

(凸版製本)

小店出版物に就ては永久に責任を負ひ度く存じ申上り候。丁落らかすまじ。是台場の手丁。直接小店へ申出下。い







798

167



